

第3章 前期古墳と出現期古墳について

第1節 古墳時代「前期」と前方後円墳

1. 「前期」研究略史

ここまで、草刈編年に基づき、方形周溝墓等と報告されたものを含む古墳の資料を時期的に細分してきた。では本論の主題である「前期古墳」はどのような基準で設定され、どのような展開を見ているのか、具体的に言及していきたい。まず、古墳時代「前期」という名称に関してであるが、近年の研究史に限り要約すると、以下にほぼ集約される。すなわち

- ①「前期」を古墳時代最古の時期区分とし、「前方後円墳」の出現をもって定める。これ以前は弥生時代であり、「方形周溝墓」「墳丘墓」等である。
- ②「前期」を古墳時代最古の時期区分とするが、必ずしも「前方後円墳」の出現をもって定めるものでなく、「前方後方墳、突出部付円墳」等地域の実態に即した古墳発生の画期を求めるべきである。
- ③「前期」を古墳時代最古の区分としないが、「前方後円墳」の出現をもって（前期と）定める。それ以前の「前方後方墳、突出部付円墳」等の存在を「出現期」として最古の古墳時代区分とする。

これらの解釈からは、次の問題もさらに派生する。①、③においては「前方後円墳」が常に主人公であるため、その定義が問われることとなる。すなわち「定型化（した前方後円墳）」という概念規定が具体的にどのようなものなのか、という疑問である。具体的には「定型化」の象徴とも言える「箸墓古墳」、定型化以前の前方後円墳と言われる「纏向型前方後円墳」¹⁾、房総地方では「突出部付円墳（神門古墳群等）」をどう捉えるか＝どれが前方後円墳でどれが古墳であるのか、その結果どこからが前期なのか、出現期とすべきなのか、等を解決しなければならない。さらに混乱するようであるが、②あるいは③の立場においては、極論として時期的に「弥生時代」であっても「古墳」の発生を認める、という姿勢すらある。全国古墳研究の先学がどのような立場であるか、ここで紹介することはご容赦願いたい、近藤義郎氏、都出比呂志氏、白石太一郎氏の基本的立場は①であり、近年の前期古墳研究の起点となっていることは言うまでもない。

結論から言えば「前期」＝「前方後円墳の出現」まではかなりの賛同を得られそうである。しかし、日本史レベルで「最古の古墳時代区分」の名称とするには現状では異論が多いかもしれない。かと言って地域ごとに異なる「前期」が幾つも登場することを是とすべきであろうか。「古墳」の概念や発生論がどのように展開しようが、各地域で「前方後円墳」を主体とした「前期」の基準を摺り合わせるべきであろうし、最小公倍数的であっても、数値的に示されることが本来は望ましい。こうした方向を目指すために、「前方後円墳」に対する近年の先学の主張を今一度確認しておきたい。

近藤義郎氏²⁾の基本姿勢は常に厳然としたものであり、前方後円墳からの時代が古墳時代（前期）である。この揺るぎない存在に対応する形で、多くの研究者が地域的な古墳発生論を展開させていると言っても良い。氏の主張は、前方後円墳と弥生墳丘墓との大きな差を「断絶」とせず、在地的な「飛躍的継承」とし、したがって外圧（中国や朝鮮半島）を極力排除した視点で貫かれている。全国に展開する前方後円墳は、決して画一的なものでないが、大和の大首長の前方後円墳を頂点とした「普遍性の中の格差（較差）」

の全土的形成が古墳時代（前期）の始まりであるとする。こうした姿勢は、時代区分論に対しても「弥生墳丘墓の大形化，突出部の形成をもって……在地型古墳，弥生型古墳（具体的には神門古墳群や纏向型前方後円墳等を指すのであろう）の出現と見て，前方後円墳時代との区分を取り払おうとするが如き見解は……考古学上の時代区分の意味を取り違えた結果である。」と断言している。さらに土器型式についても「時代を細分するのに役立つ時代を画することはできない」としている。

都出比呂志氏³⁾は、弥生時代後期後半期の岡山県楯築（たてつき）遺跡の墳丘墓について、卓越した墳丘と手厚い葬法を認め、「鏡の副葬が無いことを除けば後の古墳と共通する」としながらも、山陰地方の四隅突出墓等に見られる、この時代の「地域による差異」を強調する。弥生時代終末期とした千葉県神門古墳群においては「前方後円墳に近い墳丘墓」が出現しているが、その後の「典型的な前方後円墳」＝規模をはじめ、墳丘段築成、北頭位埋葬等の出現から、両者の断絶があまりに大きいことが主張されている。前方後円墳は首長権継承儀式的祭壇としても機能し、前方後方墳もこの過程で成立したとする。そしてこれら弥生墳丘墓からの一連の転換は、「中国の宗教的イデオロギー」が影響を与えていると結論づけられた。さらに、前方後円墳を作り上げたのは、特殊壺と特殊器台の存在、北頭位埋葬が共通する「畿内・瀬戸内」連合であるとした。畿内と瀬戸内、あるいは吉備地方との交流は、庄内式の土器の搬入を根拠に3世紀中頃が考えられている。これ以降、九州、北陸、そして房総地方を含む東国各地との広い範囲での人の移動があり、その中で地域ごとの前方後円墳を出現させたと想定されている。都出氏は近藤氏の基礎理論の上に、中国や各地域との接点を具体的に想定した上で、前方後円墳の出現に画期を見出している

白石太一郎氏⁴⁾も、弥生墳丘墓と古墳の見解についてはほぼ同様であるが、「楯築，纏向石塚，神門……など主たる円丘に突出部をもった墳丘墓が、後の定型化した前方後円墳の原型をなすものであることは確実であり、こうした弥生時代の墳丘墓の発展過程のなかで、どこに最大の画期を求めるかが、意見の分岐点となっている」という、やや柔軟で冷静な視点を持たれている。

以上のように、前方後円墳が古墳時代の始まりの象徴として厳然と存在することは言うまでもなく、その出現以前を弥生時代とする主張は強固である。しかし、房総地方における現実を良く考えてみたい。土器型式編年から、古式と思われる前方後円墳のひとつに、後述するように「能満寺古墳」があるが、草刈Ⅱ期（遡ってもⅡ期前半）に位置付けられる。したがって、これ以前（草刈Ⅰ期併行期）の方墳，前方後円墳については、能満寺古墳以前の前方後円墳が確認出来ない現状では、すべて弥生時代墳墓、あるいは「在地型古墳」「弥生型古墳」である。確かに能満寺古墳は70mを越える大形古墳であり、それ以前の、例えば高部古墳群（前方後方墳）が30m級であることを踏まえると、規模については突出した存在である。しかし、規模以外にも墳形、主体部構造、出土土器や副葬品等の比較から、例えば能満寺古墳において「飛躍的」な継承要素を指摘し、高部古墳群には「飛躍的でない」在地色の強い、弥生墳墓としての要素を見出し、説明しなくてはならない。こうした点について次章でもう少し触れてみたい。

2. 土器型式から見た前方後円墳出現に関する三つの時期

前方後円墳については第4章で詳しく言及するが、ここでは草刈編年上の大まかな特性を示唆したい。

房総地方における前方後円墳の出現に関し、第1の波（時期）は草刈Ⅰ期の段階にある。養老川流域では国分寺台に存在する神門5号墳，4号墳，3号墳，長平台288号墳，村田川では小田部古墳，小櫃川では愛宕4号墳，滝ノ口9号墳，矢那川では高部30号，32号墳等が主な古墳として出現していたが、このう

ち神門古墳群と小田部古墳はいわゆる突出部（陸橋部）付円墳であり、平面形は前方後円形を呈している。神門古墳群は田中氏による分析で既に明らかなように、出土土器に北陸系、東海西部系が顕在化しているが、系譜の分析をさらに強めると、例えば神門5号墳出土の装飾壺には、庄内式初期の技法と在地的な後期弥生土器の融合が認められ、神門4号墳の有飾の有段（二重）口縁壺にも、庄内式の櫛描波状文の系譜を無視できない。また、小田部古墳には明らかに東海地方西部の土器がもたらされている。こうした初現期の前方後円形の古墳には、在地、畿内、東海西部、そして北陸の系譜が融合していると言って良い。一方、前方後円形以外の、例えば愛宕4号墳（方墳）、高部古墳群（前方後方墳）、滝ノ口向台9号墳（前方後方墳）、阿玉台北A-7号墳（前方後方墳）、戸張一番割古墳（前方後方墳）、大崎台13号（方墳）等であるが（方形周溝墓との差別化の問題は後述する）、戸張一番割、大崎台例は畿内系譜が極端に顕在化し、高部、滝ノ口例は東海系、畿内系、在地系の融合、愛宕例、阿玉台北例は在地性が強い等、地域による外来系譜と在地系譜の偏在性が極めて大きい。こうした地域色の強い古墳の中で、養老川、村田川の近接した一帯のみ前方後円形の古墳の出現を見ていることは何を物語るのであろうか。なお、ここで留意しておきたい点は、外来系土器の存在解釈である。この出現イコール外来文化の受け入れ、でないことは当然であるが、土器だけが動くことはないわけであり、必ず人間が介在する。そこには派遣、婚姻、争いの等様々な交流現象に加え、習俗、慣習等の伝播も想定されることは前提としておきたい。

副葬品については、神門古墳群のみ、金属製品において傑出した内容と言える。5号墳の多孔平根式鉄鏃、4号墳の定角式鉄鏃の古墳出土は県内で類例が無く、畿内、東海西部の外来系譜が想定できる。ガラス玉類は弥生時代からの継続性が強い副葬品であるが、神門4号墳における多量の破砕品に見る祭祀のあり方は、在地の弥生墓制からの脱却と考えざるを得ない。一方、主体部構造では、粘土を使用しない在地的な（組合せ式？）木棺直葬がこの時期に一般的であった可能性が高く、粘土槨、割竹式木棺が明確に見られるのは、後の時期の手古塚古墳の時期になってからである。このような事実から判断して、草刈Ⅰ期の段階での房総地方の古墳群には、近藤理論における墓制の「在地的な飛躍的継承」要素が一部ではかなり看取される一方で、狭い房総地方の中でさえ、土器に見る外来系要素の地域差が顕著であり、基本的な葬法すなわち主体部構造において、前時代にも共通する木棺直葬が主であることは在地性が強調される。言い換えれば、高部古墳群であっても、土器の型式観において東海ひいては畿内地方の系譜を認めたとしても、葬法において在地性が強く、死者に対する基本的な見方が「飛躍的」に転換していたとは言い切れない。なお、都出氏の言う「北頭位埋葬」も房総地方での弥生後期方形周溝墓では見られない現象であるが、草刈Ⅰ期の古墳群も同様であり、やはり在地性が強調される。土器や一部副葬品に見られる「畿内系」もあくまで型式上の波及現象であり、強力な政治権力を背後に伴ったものではなかった。その受け入れ方は地域によってかなり異なっていたと思われるが、彼らが河川を越えるような支配力を房総の地にみせたわけではなかった。このことは草刈Ⅰ期、それもおそらく前半の段階で上総地方でも各河川ごとに、ほぼ同時に前方後方墳や突出部付古墳が存在していたことから想定される。

第2の時期は草刈Ⅱ期における（大形で定型化した）前方後円墳の時代である。長南町能満寺古墳、市原市今富塚山古墳、下総町大日山古墳の3基に代表される。草刈Ⅱ期の段階は、草刈Ⅰ期に見られた外来系譜の土器が各地で受容、定着し始めている。前方部がバチ形に開き、地山成形を積極的に取り入れたと考えられる能満寺古墳、大日山古墳、前方部が直線的な今富塚山古墳と形状的には差異はあるが、主体部構造は3基に共に「木炭」使用という共通性がある。そして未だ粘土槨、割竹式木棺は見られない。三角

縁神獣鏡の伴出は共に無く、能満寺古墳では、詳細は不明であるが小形の重圈文鏡が確認されている。なお、これらの前方後円墳の「定型化」の解釈について、いわゆる「箸墓類型」等の畿内型古墳にはほど遠いが、草刈Ⅰ期の段階から飛躍的な規模の拡大を見ていると言えよう。草刈Ⅰ期あるいは草刈Ⅱ期前半での最大古墳は、高部古墳群や北ノ作2号墳をしても30m級にすぎず、径にして倍以上の拡大である。これらをして「前期の前方後円墳」とすることには問題はないであろう。ただし後の時代に発生する100mを越える大形前方後円墳や三角縁神獣鏡や粘土槨、割竹式木棺を有する手古塚古墳の被葬者達に対し、草刈Ⅱ期の段階での被葬者達の地位、実態あるいは畿内政権との関係はどのようなものであったのだろうか。

くり返すようであるが、草刈Ⅰ期では、神門古墳群や小田部古墳、高部古墳群、滝ノ口台9号墳、あるいは大崎台13号、戸張一番割古墳等の地域においては、搬入品を含む外来系土器の積極的な導入が顕著であり、北陸地方を含む交流の第一の波が存在した。畿内系が際立つ地域もあるが、それが政治的権力を伴うものでなく、全体から見れば東海西部系が圧倒的に多い。しかし、例えば国分寺台周辺では、神門5号墳から4号、3号という時間的推移の中で、(埴結合器台のように房総でも定着していく土器は別に)北陸系土器は3号墳の段階で消滅していく状況が看取されている。同時に東海西部系についてもS字甕の新たな搬入もかなり認められたが、房総地方において定着土器には至らなかったと言えよう。そのかわりに高坏については広く定着、変容していくのが特徴である。このように北陸、東海西部系については消滅、もしくは停滞期間であったとも言えようか。この時期が草刈Ⅱ期である。そして土器型式的に最も齊一的に広がりを見せ、いわゆる小形精製土器＝小形器台、小形埴の組み合わせに加え、有段(二重)口縁壺が古墳用途の土器として定着する。そしてこの現象こそ強力な畿内系(政治的権力を背景としているかどうかは別次元であり不明であるが)として想定すべきものと言えよう。まとめると、①畿内系土器は草刈Ⅰ期では小地域的格差をもって断続的に波及、定着し、さらに草刈Ⅱ期の段階では汎地域的に小形精製土器や有段口縁壺の波及、定着という大きな波を起こしている。②東海西部系は草刈Ⅰ期の段階で畿内系以上の波を与えたが、その後房総地方での受容、定着がはかられた。③北陸系は草刈Ⅰ期の段階で小地域的に波及したが、いずれも畿内系譜と伴う付随的な系譜と言え、草刈Ⅰ期の段階で消滅する。以上の土器型式の推移から判断すると、草刈Ⅱ期の段階での畿内系譜に集中される第2の波に注目せざるを得ない。こうした中で発生した古墳が能満寺古墳であり、やや遅れて今富塚山古墳であると考ええる。この背景には有段(二重)口縁壺の定着、普及に見られるよう、東海、北陸地方を超越した畿内との強力な関係を重視せざるえない。しかし、一方で主体部構造、三角縁神獣鏡、北頭位埋葬や段築成といった「定型化」要素は極めて不十分な状態でもあった。いわば「地方型の定型化した前方後円墳」の発生である。

さて、こうした能満寺古墳はじめ、この時期の前方後円墳は、はたしてどの程度の勢力基盤があったのだろうか。草刈Ⅱ期の段階では、前方後円墳は極めて少ない一方、最大で30m級の前方後方墳の存在とそれを取りまく方墳群の存在が各地で認められるのが特徴である。前方後方墳は基盤集落を周囲に従える一方、能満寺古墳のような隔絶観は感じられない場合が多い。そして草刈Ⅱ期の段階で消滅していくのに対し、前方後円墳草刈Ⅲ期の段階ではじめて100mを越え、最大化する。すなわち草刈Ⅱ期の段階での集落における、基本的、一般的墓制は、前方後方墳を頂点とした方墳が主体を占めていたと考えられる。(方形周溝墓と報告されるものも存在しており、在地的な墓制は継続している)。となると、遙か遠方ではほぼ同時期に存在していた能満寺古墳被葬者は、いったいどのような立場であったのだろうか。小形精製土器や有段口縁壺の出現、定着には畿内政権の政治的権力の波及を想定しやすいが、ならば当時の権力の象

徴、具現化とも言える墓制において、なぜこれほどまでに前方後方墳と方墳の存在を各地で許容し、自らも畿内的な葬法を主張せず、在地と融合していたのであろうか。畿内政権を背景とした政治的支配力を支配者に求めるなら、それは草刈Ⅱ期の段階ではまだ出現していなかったと言えよう。

なお、今のところ仮説の域を超えるものではないが、能満寺古墳については、茂原市国府関遺跡出土遺物群に注目せざるえない⁵⁾。出土土器には草刈Ⅰ期併行期も含まれるが、草刈Ⅱ期以降も存在している。となると、かなり離れた位置（一宮川を約8km程上る）ではあるが、能満寺古墳の築造時にキヌガサ、赤塗木剣、琴板等、明らかに権威象徴的と同時に極めて呪術的、祭祀的とも言えるべき特殊品が多量に存在していたことも比定できない。能満寺古墳被葬者は、当時数少ない前方後円墳に葬られたが、それは畿内の政治的権力の象徴でなく、それ以前にもたらされた呪術的、祭祀的性格の強い人物ではなかったのか、と考えている。

さて、80m～100m級の大形の前方後円墳が房総地方で出現してくるのは草刈Ⅲ期から和泉式（中期古墳）にかけて、そのピークがあると言って良い。これが第3の波（時期）である。養老川の釈迦山古墳（93m）姉崎天神山古墳（130m）、小櫃川の浅間神社古墳（103m）、飯籠塚古墳（102m）、白山神社古墳（88m）一宮川の油殿1号墳（93m）、栗山川のしゃくし塚古墳（82m）、利根川下流の三之分目大塚山古墳（118m）、である。未調査のものも多いが、墳形等から判断すると前方部が発達したものが多く、また出土遺物から中期に属するものも含まれる。但し、大形化が普遍的と言うわけではなく、利根川下流の滝台古墳は61m、弁天古墳に至っては35mである。なお、こうした墳丘の変遷については後述してある。草刈Ⅲ期においては、冒頭でも述べたとおり、釈迦山古墳が重要古墳として確認調査が行われている。粘土槨、割竹式木棺と思われる一方、北頭位埋葬は認められない。出土品で最も注目されるのは柱状脚高坏であり、この系譜の分析が重要である。草刈Ⅱ期までの高坏は、草刈Ⅰ期を起点とした東海西部系の受容と定着、変容であった。しかし、草刈Ⅲ期において、布留式初期段階の柱状脚高坏が搬入、定着している。釈迦山古墳出土品は中空であるが、中実のものも存在する。これは特に柱状化が際立ち、完全な円柱状を呈し、裾がラッパ状に屈曲外反するもので、公津原遺跡等、北東部地域によく見られるものである。北陸地方や東北地方南部にも共通する形状であり、直接の出自は不明であるが、畿内系としたとしても、波及ルートが釈迦山例のように直線的なものではなく、北方ルートにより変容、定着したものと考えている。

いずれにしても草刈Ⅲ期においては、新たな畿内の系譜が認められる一方、それまでの小形精製土器群は消滅していくことになる。やがて古墳用途として、土器そのものの使用が無くなるという方向性も看取されている。一方で古墳用途として注目されてくるのが、埴輪壺とも言えるべき特殊な壺であろう。釈迦山古墳でも出土した大形の埴は、全容が明らかでないものの、朝顔状に開く口縁部は、大厩浅間様古墳や鶴塚古墳という草刈Ⅲ期以降の古墳に共通する現象と考えている。こうした埴輪への萌芽は茨城県上出島2号墳等にも見られ、利根川を超えた広範囲での墓制、葬法の共通性が注目される。上出島は前方後円墳、大厩浅間様は円墳という違いも併せ、こうした強いつながりの背景には、どのような支配勢力を想定したら良いのであろうか。おそらく釈迦山古墳に、畿内地方の布留式土器を伝えた勢力、現象と無関係ではなかったはずである。なお、大厩浅間様に代表される「円墳」の普及、定着もまた草刈Ⅲ期の特徴である。墳丘や主体部構造が明確でない小形円墳が方墳同様、群構成を示す状況を経て、大形の有力円墳が各地で出現する現象は、この時期の前方後円墳の出現とは別の系譜と考えておくべきであろうか。

草刈Ⅲ期の前方後円墳でもう一つの大きな課題がある。それは手古塚古墳である。房総地方で唯一「三

角縁神獸鏡」の出土があり、長大な粘土槨、割竹式木棺を有する定型化した前方後円墳と言える。但し、全長が60mであり、立地的にも矢那川最下流に位置する。100m級の大形前方後円墳が小櫃川中流域に点在するのに対し、極めて対照的である。編年の基準の一つが布留式の「朱甕」というのも微妙であるが、巻末図版でも明らかなように多くの「銅鏃」の型式は、若干遡る編年観があるかもしれないが、石釧等の石製品や直刀には草刈Ⅲ期以降の要素と考えざるを得ないであろう。このように草刈Ⅲ期の間には、畿内政権との連合ともいえるべき三角縁神獸鏡の出土、河川を上る100m級大形前方後円墳勢力、利根川を超える広範囲の勢力基盤の存在、円墳の定着等が断続的に展開していた激動の時期であったと言えよう。

注

- 1) 寺沢 薫「纏向型前方後円墳の築造」『同志社大学考古学シリーズⅣ』『考古学と技術』 1988
- 2) 近藤義郎「前方後円墳の誕生」『岩波講座日本考古学6』 1986
- 3) 都出比呂志「前方後円墳の誕生」『古代を考える 古墳』白石太一郎編 1989
- 4) 白石太一郎「日本古墳文化論」『講座日本歴史』1巻 東京大学出版会 1984
白石太一郎「初期ヤマト政権の成立 前方後円墳出現の意味と歴史的背景」
『新視点 日本歴史2 古代編』新人物往来社 1993
- 5) 『茂原市国府関遺跡群』財団法人長生郡市文化財センター 1990

3. 前期の区分—土器型式から見た房総地方最古の前方後円墳—

前項において、今富塚山古墳、能満寺古墳、大日山古墳について、草刈Ⅱ期の段階での前方後円墳に位置づけた。今のところ、この3基が県内最古の前方後円墳の候補と言って良い。しかし、いずれも全面調査が実施されておらず、確定的ではない。特に大日山古墳は出土土器は不明である。したがって今富塚山、能満寺古墳出土の土器の型式観について、再度確認しておきたい。

①市原市今富塚山古墳（第2章 第84図参考）

全長約110mで埋葬施設に木炭を使用している。時期決定の根拠は第84図の有段口縁の底部穿孔壺（1～6）である。草刈編年において有段口縁壺の変遷は、草刈Ⅰ期後半段階での神門4号墳の搬入品例を初現期と見ている。畿内系であり、その後草刈Ⅱ期前半において無文化し、後時代まで定着する。前方後円墳には普遍的に副葬され、集落内部でも使用されている。型式的には神門4号墳例のような外側に大きくハの字に開く尖底状のものから、次第に水平方向への張り出しが弱まり、草刈Ⅱ期後半では草刈A103号墳、東間部多2号墳に見られる、有段簡略化及び胴部横ふくれ形状を経て、草刈Ⅲ期では形骸化する（第1図編年表参照）。一方、報告者の判断では第84図1から6まですべて（有段口縁）底部穿孔壺片としているが、2を含んだ場合、有段下部がふくれた形状の壺となり、無文化した有段口縁壺としては房総地方で類例を見いだせず、茨城県香取神社古墳（第204図）出土例が唯一である。仮にその形状であった場合、形骸化したものと言え、編年的には草刈Ⅱ期後半からⅢ期にかけての姿相である。しかし、第84図のように、2を除外して形状復原した場合を考えてみたい。口縁部は大きく斜めに張り出した形状で、復原高約40～50cm、球体胴部にはなるが口径をそれほど凌駕しない。すなわち神門3号墳に類似するものとなる。また、底部を焼成前に垂直に切り取ってあり、壺としての形状を損なわないものであり、第4図65のような胴下半部切断方式では無い、古相とも言える技法である。一方、(2)については有段口縁高坏の破片とも考えられる。となれば畿内系として草刈Ⅱ期前半まで遡ることはできる。以上の分析については、非常

に細片である出土資料からの推論である。断定はできないものの総合的には草刈Ⅱ期の範疇には入る前方後円墳としたい。

②長南町能満寺古墳（第2章 第174図参考）

以前は前方後方墳ではないかと言われていた。もしそうであつたら、30m前後にとどまっていた古式の前方後方墳の系譜の被葬者層が、前方後円墳以前のあるいは同じ頃、何らかの影響により、地域的な首長として飛躍的に強大化したと考えざる得なかった。しかし、前述したとおり、平成7年度に、くびれ部形状確認調査、周溝範囲確認調査が行われ、全長73mの前方後円墳であることが確定した。その時の調査では古墳に伴うとされる土器は出土していない。したがって第174図にある明治大学の資料が基準となる。(1)、(2)は今富塚山古墳と類似する有段口縁底部穿孔壺である。口縁部の張り出しが強く、水平である形状は草刈Ⅱ期後半には積極的に見られない。また、高坏については小形の椀状坏部を持つ元屋敷系であるが、坏部がやや扁平化し、器高が高くなっている状況は草刈Ⅱ期前半に比定されよう。一方で、柳葉形銅鏃については、第4章の田中の分析ではこの編年観には必ずしも当てはまらない要素が強い。したがって、今のところ草刈Ⅱ期という大枠で捉えておくべきであろうか。なお、鏡については小形の重圈文鏡が見られるが詳細は明らかでない。以上のことから、現状では能満寺古墳が房総地方最古の前方後円墳（草刈Ⅱ期）であるが、この時期をもって房総地方の古墳時代前期の始まりと確定できるわけではない。しかし草刈編年上、これよりも古い型式となると草刈Ⅰ期であり、後述するように房総地方ではこの時期は小形方墳、前方後方墳が展開している。したがって前方後円墳を基準とした時期区分であれば、現状では「前期」の開始を、草刈Ⅱ期に見ていくことに問題はないと考えている。

4. 出現期の区分－草刈Ⅰ期併行期の古墳－

前節では能満寺古墳＝草刈Ⅱ期を古墳時代「前期」としたが、それではこれ以前の草刈Ⅰ期併行期に属する、小形方墳、前方後方墳等をどう捉えるべきであろうか。近藤理論に基づけば、房総地方では能満寺古墳よりも古く、かつ定型化した前方後円墳の存在が確認されない限り、これら草刈Ⅰ期に属する古墳群はすべて弥生時代墳墓もしくは方形周溝墓ということになっていく。しかし最近の調査例を見ると、古式の前方後円墳の発見は無く、冒頭でも述べたとおり、前方後円墳とかつては言われ、粘土槨主体部の沼南町北ノ作2号墳が、前方後方墳であることが判明するなど、前方後円墳に関する状況変化は認められない。むしろ草刈Ⅰ期併行期の方墳（陸橋付を含む）、前方後方墳の良好な発見例が相次いでいると言えよう。「古墳」の概念規定や「古墳発生論」は、研究者の歴史観に基づくものであり、今後も論争が絶えないと思われるが、それが根本的に異なると言うのなら、永遠に解決できない、あるいは少なくとも良い課題なのかも知れない。時代区分が明確な歴史時代の場合、例えば封建支配者の権力掌握日をもって〇〇時代が始まる、とされるが、この場合、それに伴う「社会構造等の変遷上の画期」の追究は後回しにされ、記念日的な時代区分が優先されていることが特徴である。したがってそうした区分を取り入れない考古学上の「古墳時代」ゆえに、常に論議の対象とならざるを得ないのである。

これまで「前期」「前方後円墳」を中心に論を進めてきたが、ここでは研究史的にも対峙する形で登場した「出現期」についても触れておく必要がある。房総地方における「出現期」の研究については、言うまでもなく市原市神門古墳群における田中新史氏の主張が起点であり、基本である¹⁾。また、出現期に属するいわゆる「纏向型前方後円墳」を提唱した寺沢薫氏²⁾や、纏向石塚古墳をめぐる石野博信氏³⁾の主張と共に、先の近藤義郎氏らの古墳論に対峙する形となっている。この他の県内の研究者として、近藤理

論に立つ沼沢豊氏は（定型化した）前方後円墳の出現以前は弥生時代墳墓，と明確に規定した上で房総地方の古墳を捉え集成，分析されており⁴⁾，大村直氏も「小田部墳丘墓」（小田部古墳）の報告例でもその姿勢は明らかである⁵⁾。これに対し，白井久美子氏は国分寺台遺跡群における出現期古墳の主張⁶⁾，小沢洋氏は高部古墳群における，前方後円墳出現以前の前方後方墳の主張⁷⁾がある。

このように，多くの研究者によって語られることの多い「前期」「前方後円墳」以前（本論でいう草刈Ⅰ期併行期）の古墳群であるが，本論では先述したとおり土器型式区分により，草刈Ⅰ期を弥生時代の範疇から脱却した型式観＝土師器とした。したがって古墳本体からの分析ではないが，この時期の所産は，便宜的にすべて古墳と呼ぶことにする。

注

- 1) 田中新史「出現期古墳の理解と展望」『古代』77 1984
- 2) 寺沢 薫「纏向型前方後円墳の築造」『同志社大学考古学シリーズⅣ』『考古学と技術』1988
- 3) 石野博信，関川尚功『纏向』1976
- 4) 沼沢 豊「東日本一千葉」『古墳時代の研究11』1990
- 5) 大村 直『小田部向原遺跡』財団法人市原市文化財センター 1991
- 6) 白井久美子「長平台遺跡の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』1982
- 7) 小沢 洋「高部古墳群」『前方後方墳の再検討』埋蔵文化財研究会 1995

第2表 時期区分上の諸問題

時 代 区 分	設 定 基 準	土 器 型 式 編 年		
		草 刈 編 年	下総地方併行例	土器の種別
弥 生 時 代 後 期	—	—	—	弥生土器
古 墳 時 代 出 現 期 ※1	最古の古墳の出現	前半	阿玉台北1期	土師器 ※2
		後半	諏訪原1期	
古 墳 時 代 前 期	前方後円墳の出現	前半	諏訪原2期 阿玉台北2期 公津原1期 戸張作1期	土師器
		後半	阿玉台北3期 戸張作1期	
		草 刈 Ⅲ 期	公津原2期 戸張作2期	
古 墳 時 代 中 期	須恵器の出現(※3)	和 泉 式	戸張作2期	

※1 「弥生時代終末期」（もしくは後期末，後期後半等）とした場合，草刈Ⅰ期（前半，後半）に所属するものは「墳墓」もしくは「方形周溝墓」となり，※2 は弥生土器である。

※3 当センター刊行，『房総考古学ライブラリー古墳時代(Ⅰ)』での基準

第2節 出現期古墳と方形周溝墓

1. はじめに

本論では上記のとおり、「出現期」は土器の型式観から古墳時代であり、したがって「方形周溝墓」は「方墳」と呼称するという基本姿勢ではあるが、本節においては先学の業績を紹介する上での混乱を避けるため、「方形周溝墓」名称を使用することを前提とする。

房総地方では草刈編年に基づけば、突出部（陸橋付）古墳（以下陸橋付古墳に統一）、小規模方墳、前方後方墳が前期以前に存在する。まず、村田川と養老川に挟まれた上総国分寺台を中心に展開した陸橋付古墳群であるが、これらの評価については古くから田中新史氏により行われている。その他、小櫃川水系の愛宕4号墳、滝ノ口向台9号墳、10号墳、矢那川水系の高部古墳群についても注目される場所である。これらは「墳丘を有する」故に、研究者の多くは、土器の型式観にそれほどとらわれず「古墳」と認定しているものもある。これに対し、同じ草刈Ⅰ期に属する「大崎台13号」等は墳丘を持たず、「方形周溝墓」等と認識される場合が多いのではないか。しかし、出土遺物や周囲の遺構との関連において、例えば大崎台13号は1辺が20mをはるかに越え、隔絶された位置にある単独の大形（方形周溝）墓であり、出土土器のほとんどが畿内地方を中心とした（搬入品を含む）外来系で占められている。畿内系の土器が出たから古墳、という判断ではないものの、愛宕4号墳出土の在地の弥生色の強い土器群を伴う「古墳」と、大崎台13号の搬入品を含む外来系土器群で占められる「方形周溝墓」についての解釈は、どのような基準に基づくのか追究すべきであろう。本紀要は土器から見た「前期古墳」の展開を主旨としているが、こうした前期以前の状況についても言及しておく必要がある。以下水系ごとにとりまとめておきたい。

2. 各水系ごとの分布

村田川、養老川水系では小田部古墳、養老川は国分寺台遺跡群である。すべての古墳が辺中央に陸橋部を有し、出土土器には北陸、東海西部の外来系譜が主体である。特に北陸系は房総における初現と考えた。小田部古墳は出土土器の一括性に疑問が多いものの、東海西部系が明瞭であり、元屋敷系高坏の存在がある。しかし、編年的には、定型化した小形埴出現以前の在地編年観から草刈Ⅰ期に対応させている。北陸系は今のところ認め得ない。国分寺台遺跡群については加茂C1号、東1号、神門5号、長平台288号が北陸、東海西部の系譜を指摘されているが、私見では櫛描波状文には畿内系を無視できないと考えている。神門古墳群にはその後も4号墳の段階までは畿内系、北陸系、東海西部系が共存するが、神門3号墳に至り北陸系の消滅を見ている。こうした単純な外来系譜の比較から言えば、小田部古墳は北陸系の消滅時期に併行するかもしれない。

さて、墳丘をもつ出現期の古墳が営まれていた頃、当地では同時に「蛇谷方形周溝墓」（第97図）が形成されている。在地系土器を主体とし、畿内、東海西部系の技法、形状を融合させたような土器が見られるが、先に見た出現期古墳群に比べ、明らかに外来系譜色が弱く、土器の胎土から判断しても在地のものである可能性が高い。また、鉄、玉等の副葬品も持たない。なお、加茂C1号墳は当初は「方形周溝墓」とされていたが、副葬品の豊富さが区別化を促したことは否めない。

こうした村田川、養老川水系の状況と同様に、小櫃川水系では同時期に「方墳」、「方形周溝墓」とそれぞれ報告されているものがより多く共存している。第一に注目すべきは愛宕4号墳である。僅か（約20cm）

ではあるが墳丘を有するという事実、中央主体部の検出、短剣、ガラス玉、という副葬品の組合せさらに、菊川式に繋がる東海東部系かと思われる高坏が、在地系壺とともに出土している。土器の型式観を弥生土器とするか土師器とするかは意見の分かれるところであり、同時に「墳丘を持つ方形周溝墓」あるいは「弥生墳墓」とするか、「方墳」とするか、がさらに議論されよう。このことについて解決の糸口となるのが、小櫃川水系において、弥生後期から草刈Ⅱ期にかけて方形周溝墓と報告されている一群の系譜、すなわち林Ⅱ遺跡（第105図）から西ノ窪（第123図）、上大城（第124図）、向神納里（第126図）、田川（第128図）各遺跡に至る各方形周溝墓群である。林Ⅱでは在地弥生土器の装飾壺とともに底部穿孔の単口縁の壺が伴う。土器に限って言えば、この様相と愛宕4号墳出土品をどのように区別したらよいのか分からない。両者の決定的な違いは短剣、ガラス玉といった副葬品と20cmの墳丘の有無である。副葬品の有無、あるいは格差によって「方墳」と「方形周溝墓」の区別が可能かどうかは分からないが、少なくともこの地域では、愛宕4号墳以後、古墳時代前期（草刈Ⅱ期）に至るまで、西ノ窪、上大城等の方形周溝墓にはガラス玉や鉄製品等の副葬品はほとんど無く、上大城では土玉が定着している。一方、墳丘を持つ「二又堀方墳群」等では少なからずガラス玉他副葬品が見られる。

一方、印旛、手賀沼水系、利根川水系等、下総地方では一つの特徴が顕著である。それは出現期（草刈Ⅰ期）の段階では、愛宕4号墳のような（僅かであっても）墳丘をもつ「方墳」が見られない点である。そのため、いずれも報告者によって明確に「方形周溝墓」とされている。さらに大崎台遺跡の畿内系土器（第208図）、石揚遺跡（第238図）やヲサル山遺跡（第219図）に見られる豊富な副葬品は、同時期の小櫃川水系と様相を異にしている。また、神々廻方形周溝墓群（第241図）にあるよう、草刈Ⅱ期に至っても、墳丘を持たず、中央主体部を有する場合がある。すなわち当地方では、弥生時代の方形周溝墓の系譜が古墳時代前期（草刈Ⅱ期）に至っても、より強く継続していると考えられる。同時に草刈Ⅱ期の段階で、公津原古墳群（第220図）等に見られるよう15mを越える明確な方墳群が出現してくる。しかし、こうした現象は画一的、突発的なものではなく、飯合作遺跡（第211図）に見られる方形周溝墓と方墳の混在こそが、両者の漸移的な消長を示していると考えられる。

3. ま と め

以上のように、上総地方の一部では15mを越える方墳が、出現期においていち早く発生する。同時に方形周溝墓は存在こそするものの、一部の副葬品等に見られるよう、何らかの差別化が図られてくる。これに対し下総地方の一部では、墳丘の無い中央主体部の方形周溝墓が継続し、上総地方と同様な方墳の出現には未だ時間を有する状況であった。しかしながらこうした状況をさらに混乱させる出来事がこの時期発生している。戸張一番割遺跡や阿玉台北遺跡に出現した「前方後方墳」である。下総地方では以前から、古式の古墳は前方後方墳が多いことで知られ、草刈編年においても最古の古墳は戸張一番割古墳（第227図）（草刈Ⅰ期＝出現期）である。方形周溝墓が継続的であった時代に、方墳（陸橋付も含む）ではなく前方後方墳を受け入れる要因は何であろうか。房総地方における前方後円墳出現以前の状況は、このように地域差を見せながら、複数の墓制系譜の共存を生み出し、決して一元的では無い融合した社会状況が看取される。方形周溝墓と方墳も同様であり、これらの消滅や出現を具現化することは極めて難しいと言えよう。こうした複雑な状況は、しかし、草刈Ⅱ期の段階において、房総地方でも70m級の大形前方後円墳の出現（能満寺古墳）を見てからは、中央主体部を有する明確な方形周溝墓も消滅していく。この最後の

姿は手賀沼水系の神々廻（ししば）方形周溝墓群（第241図）ではないかと今のところ考えている。

山岸良二氏は『「方形周溝墓」から「古墳」への推移過程は、内面的な差異としては副葬品にみられる属性（農耕集団内での祭祀権掌握度）がどの程度高揚してきた段階と把握するかという点と、当然その変化に伴う被葬者層の集団内地位の向上による「墳墓造営に要する集団エネルギー」の強大化、そしてその結果として「立体的表徴」＝「墳丘」構築へと変化していった到達点が「定型化された古墳」¹⁾とし、時期的には「焼成前底部穿孔壺形土器中心」＝第3段階としている。この第3段階とは、草刈編年で言えば草刈Ⅱ期前半（古墳時代前期前半）であり、後半では、小形の壺も増加し、底部穿孔というよりも胴部下半部を切り取る形状も出現している。このように山岸氏の指摘した土器穿孔行為の視点からの葬送儀礼の規定、古墳概念は、草刈編年上では妥当性がある。一方、「副葬品にみられる属性の高揚」＝強大な首長層＝定型化した古墳という図式についてはいかがであろうか。「剣、槍、刀」「鏃」「玉類」の3属性の組合せが多種に具現化していく時期が第3段階（草刈Ⅱ期前半）であるとされているが、第6表の副葬品の出土状況によれば、草刈Ⅰ期（出現期）と草刈Ⅱ期（前期）の違いが理解できる。鏃は鉄鏃が初めにもたらされ、やがて銅鏃が加わる一方で、剣は草刈Ⅰ期（出現期）の象徴が「短剣」と「槍」であり草刈Ⅱ期以降に長剣や刀が定着する（次節参照）。

山岸氏の指摘する第3段階における「剣、槍、刀」「鏃」「玉」の組合せ、が具体的にどのようなものなのか、明確ではないが、草刈Ⅱ期（前期）における「短剣、槍」の欠落、「銅鏃」の伴出、玉類の石材の多様化等をその姿相として捉えるべきであろう。この結果、この時期に能満寺古墳他、初現期の「前方後円墳」の出現を見ている。「定型化した古墳」はすなわち定型化した「前方後円墳」とすべきであろう。

注

- 1) 山岸良二編「方形周溝墓研究における今後の課題 関東の「古墳」と「方形周溝墓」」1996
『関東の方形周溝墓』同成社

第3節 主体部（埋葬施設）構造の変遷

1. 木棺の種類と変化

竪穴式石室とそれに伴う長大な割竹形木棺は、「定型化した前方後円墳」の重要属性と言われる。しかし、房総地方では一切見ることはない。石を産出できない、という理由だけでなく、石のある他の関東諸地域にさえ存在していない。しかし、今回の集成で明らかのように、割竹形木棺及び粘土槨については草刈Ⅱ期の北ノ作1、2号墳を最古に、主に草刈Ⅲ期の段階で墳丘形状に関係なく、取り入れられるようになる（第3表）。出現期（草刈Ⅰ期併行期）の段階では、市原市神門4号墳、小田部古墳（共に突出部付円墳）にあるよう、3m前後の木棺を埋め込んだ、墓坑内木棺直葬が主であったと思われる（第249図）。共に頭位付近に赤色料が散布され、神門4号墳では墓内祭祀が行われ、多量のガラス玉が破碎されている。いずれにしても旧表土上ではなく、一定の盛り土を行い、その面で土抗を掘り、木棺を埋め込んだと想定される。同時に当時の生活面よりも高い位置での祭祀が執り行われたと考えられる。木棺がどのような構造であったのか知る由もない。しかしこの当時、茂原市国府関遺跡出土の木製品を見ても¹⁾、3m程度の板材への加工、細工、継ぎ合わせ等において、かなり進んだ技術が既に取り入れられており、組み合わせ式の箱形木棺を作成することも容易であったに違いない。なお、埋葬人数は単葬であったことは副葬品等からも明白であるが、それでいて神門4号墳、小田部古墳とも木棺が3m前後であるとすれば、それが一つの長さの基準であったのかも知れない。

その後、草刈Ⅱ期前半の段階で、沼南町北ノ作1号（陸橋付方墳）、2号墳（前方後方墳）が出現する。ここにはじめて「粘土槨」が用いられることとなる。但し、厳密な意味での「槨」では無い。特に1号墳においては報告では、粘土を床に敷いただけの「粘土床」であった可能性も高く、その中（上）に納められた木棺も3m前後と想定され、出現期古墳に近い。また、割竹形木棺であったかどうかは明確ではない。おそらく神門4号墳や小田部古墳のような木棺に、補助的な支えとして粘土が使われ始めた時期であったのかもしれない。一方、2号墳では5mを越える木棺が想定されており、断面観察から割竹式木棺の可能性も高い。2号墳は1号墳より僅かに後出的であり、そうした意味で草刈Ⅱ期前半段階における、出現期古墳から前期古墳への構造変化の過渡的な状況を示すものなのかもしれない。

同じく草刈Ⅱ期の段階で取り入れられた特殊な「槨」がある。それは木炭槨である。注目すべきは長南町能満寺古墳、下総町大日山古墳、市原市今富塚山古墳という古式の前方後円墳に共通している点である。この採用が単なる防湿、濾過等の技術的要素だけとは考えられない。木炭槨は、後の時代あるいは周辺諸地域でも見られるものであるが、大日山古墳では割竹形木棺（もしくは舟形木棺）を使用している。粘土の使用は（粘土槨以外は）木棺の単なる支え、充填材としての要素であることは、多くの出土例からも説明できるが、木炭で覆う（あるいは木炭を敷く）という行為とともに、割竹形木棺が使用されたという事実は、被葬者への特別な意識を持つものと考えている。

草刈Ⅲ期の段階になると、粘土槨とセットのような関係で割竹形木棺が出現してくる。最も良好な検出例は市原市新皇塚古墳（前方後方墳）である。長大な粘土塊が墳丘で検出され、その中をくり抜くような形状で2つの長大な木棺の痕跡が見られる（第249図）。いわゆる1槨2棺で、北槨は実に約14mもの全長を図る。木棺が置かれていた底部はU字を呈し、それが割竹形木棺であったことは明白である。また、副葬品の出土状況からすると、木棺の中央に遺体が埋葬（単葬）されていたようである。なお、頭部は北

位を向いてはいない。房総地方では、新皇塚古墳に匹敵する粘土槨は数少ないが、木更津市手古塚古墳（前方後円墳）では一面の粘土塊に推定約9mの割竹形木棺が想定されている。このように粘土槨と割竹形木棺は同時に併用されたようであるが、けっして一般的であったわけでない。むしろ今のところ確実な例は、房総地方では新皇塚古墳と手古塚古墳の2例だけである。

市原市釈迦山古墳でも推定約9mの木棺が想定されるが、粘土は槨としての塊は断定できない（第249図）。市原市大厩浅間様古墳（円墳）は想定10.5mの割竹形木棺が推定されるが粘土は検出されていない。石枕を出土した千葉市東寺山石神2号墳（円墳）、上赤塚1号墳（円墳）といった中期古墳でも長大な割竹形木棺が推定されているが、粘土の使用は限定的であり、決して「槨」ではなく、木棺の支え、充填等に、状況に応じて使用されたと考えられる（第250図）。また割竹形木棺と推定されているものも、断面観察から判断すると、本来底が平坦な木棺であった可能性もある。このように草刈Ⅲ期以降、粘土槨が出現した後も、房総地方では決して画一的、斉一的な埋葬施設の供用があったわけではない。特に畿内系土器を出土したからといって粘土槨や割竹形木棺が共通するわけでもない。房総地方では100m級の（草刈Ⅲ期に比定されるであろう）いわゆる畿内型の大形前方後円墳の埋葬施設構造がほとんど未調査であるため、それがどこまで畿内に共通していたのか知ることにはできない。しかし、房総地方最大の「粘土槨－割竹形木棺」の新皇塚古墳については前方後方墳であり、手古塚古墳についても全長は60mにすぎない。手古塚古墳は唯一、三角縁神獣鏡を伴う「畿内型」と言えるが、他の大形前方後円墳の埋葬施設構造が解明されない限り、粘土槨－割竹形木棺の出現が一概に、畿内政権の直接的影響下に組み込まれた結果、という断定はできないであろう。

2. 副葬品の出土状況

副葬品については第4章で言及するが、ここでは別表により、今回取り上げた古墳等に伴うと思われる玉類と金属製品類について、取りまとめた。玉類と金属製品は副葬品である場合や、祭祀に用いられる場合等が想定されるが、前期古墳の崩壊しやすい主体部構造や、後世の盗掘等考えると、本来的な組成量を留める場合は極めて少ないと言える。玉類は石材別に各種並べたものであり、細かな形状差、製作技法差、及び大きさの違いにまで今回は言及していない。したがって型式学的資料としては不十分と言わざるを得ないが、おおまかな使用傾向は以下のとおり看守できた。

- ①ガラス小玉は弥生後期から草刈Ⅰ期当初はコバルト着色（濃青）が多く、その後は淡色系も加わる。ガラス小玉は全時期を通じて多く出土するが、方形周溝墓と報告されたものの中には欠如があり、その代用として土玉が製作された場合がある。
- ②石材別に見ると、ガラスが全時期を通じて用いられる一方、メノウ、水晶、琥珀は草刈Ⅱ期からⅢ期、滑石については草刈Ⅲ期以降に急激に増加する。
- ③種類別に見ると、小玉、丸玉、管玉は全時期を通じて使用されるが、棗玉は草刈Ⅱ期以降、白玉、勾玉が増加するのは草刈Ⅲ期と言える。しかし、管玉や勾玉は弥生時代から数多く定着したものであり、より詳細な型式的分類が必要であり、草刈Ⅰ期～Ⅲ期の推移の中で、いくつかの系譜の違い等が指摘されると思われる。
- ④草刈Ⅲ期における玉類の種類の豊富さは前時期に比べ明確であるが（小玉、管玉、勾玉、棗玉、白玉等）石材は種類によっては、むしろ限定される傾向にある。

⑤石製品では石釧は草刈Ⅲ期、石枕は和泉期という傾向がある。

⑥円墳である大厩浅間様古墳や島戸境1号墳の出土品の豊富さは前方後円墳を凌いでおり、古墳の墳形等の違いによる格差を明確に指摘することはできない。

金属製品の遺存率は玉類に比べさらに低い。統計処理できたものは第6表のとおりである。

①槍、短剣は草刈Ⅰ期の指標となる傾向がある。

②草刈Ⅰ期当初は鉄鏃のみの出土があり、やがて銅鏃がこれに加わる。銅鏃は当初は単独の副葬であるが、手古塚古墳例にあるよう同一形態の大量副葬が認められるようになる。しかし、草刈Ⅲ期以降急激に消滅していく。

③方形周溝墓と報告されたものには鉄鏃は少ない。

④刀子の増加、直刀の出現は草刈Ⅲ期以降である。

なお、鉄鏃については、神門5号墳の多孔平根式、神門4号墳の定角式が際立って目立つ存在であり、ともに県内では類例が見いだせない。類銅鏃系である神門5号墳例に比べ、神門4号墳例は周辺地域の弥生時代に系譜を求めることはできない一方、九州地方でも類例があり、全国的な視点での把握が必要である。

第3表 掲載古墳等一覧表(1)

遺跡番号	ページ	古 墳 名	水 系	弥生後期	草刈Ⅰ期	草刈Ⅱ期	草刈Ⅲ期	和泉式※	形 状	主 体 部 構 造	備 考
1	48	小田部古墳	村田川		○				陸橋付円墳	土抗	■ 墳丘墓
2-(1)	52	草刈 A 94号跡	村田川			○			方墳		
2-(2)	52	草刈 A 99号跡 草刈 A 100号跡	村田川			○			前方後方墳	周溝内土抗	
2-(3)	59	草刈 A 101号跡	村田川			○			方墳		
2-(4)	59	草刈 A 102号跡	村田川			○			方墳		
2-(5)	59	草刈 A 103号跡	村田川			○			方墳		
2-(6)	59	草刈 A 93, 95, 96号跡	村田川			○			方墳		
2-(7)	64	草刈 B 区方墳群	村田川			○			方墳		
2-(8)	67	草刈 B 191, 274, 331号跡	村田川				○ ~ ○		円墳		
3	70	草刈 3 号墳	村田川				○		円墳	土抗	
4	73	草刈 24~26号	村田川			○			方墳		■
5-(1)	73	草刈貝塚122方形周溝墓	村田川			○			方墳	周溝内土抗	■
5-(2)	73	草刈貝塚125方形周溝墓 草刈貝塚133方形周溝墓	村田川			○			方墳	周溝内土抗	■
6	78	馬ノ口 2, 3 号墳	村田川			○			方墳	周溝内土抗	
7	79	川中 1 号墳	村田川			○			方墳		
8-(1)	80	大蔵 9 号墳	村田川			○			陸橋付方墳	土抗	
8-(2)	80	大蔵 3 号墳 大蔵 7 号墳 大蔵 8 号墳	村田川				○ ~ ○ ○ ~ ○ ○ ~ ○		方墳 方墳 方墳	土抗	
9	88	大蔵浅間様古墳	村田川			○			方墳	割竹形木棺 3	
10	93	新皇塚古墳	村田川			○			前方後方墳?	粘土槨 (1 槨 2 棺)	
11	98	七廻塚古墳※	村田川				○		円墳	木棺直葬 3	
12	98	大覚寺山古墳※	村田川						前方後円墳		
13	98	上赤塚 1 号墳※	村田川				○		円墳	割竹形木棺 2	
14	102	草刈 1 号墳※	村田川				○		円墳	木棺直葬 3	
15	105	神門 5 号墳	養老川		○				陸橋付円墳	木棺直葬	
16	108	加茂 C 1 号墳	養老川		○				陸橋付方墳		
17	108	長平台 288号, 289号墳	養老川		○				陸橋付方墳		
18	111	東 1 号墳 (持塚 6 号)	養老川		○				陸橋付方墳		
19	111	神門 4 号墳	養老川		○				陸橋付円墳		
20	115	神門 3 号墳	養老川		○				陸橋付円墳		
21	115	北旭台 73号墳	養老川			○			方墳	木棺直葬	
22	120	雪解沢 S 001号, 026-1 号	養老川			○			方墳		
23	120	東間部多 16号墳	養老川			○			前方後方墳		
24	124	東間部多 2 号墳	養老川			○			前方後方墳		
25	124	今富塚山古墳	養老川			○			前方後円墳	木炭槨, 床?	
26	128	諏訪台 33号墳	養老川			○			前方後方墳		
27	129	姉崎東原 B 29号墳	養老川			○			前方後方墳		
28	129	持塚 4 号墳	養老川				○?		方墳	土抗	
29	134	海保第 2 号墳 海保第 3 号墳	養老川				○ ~ ○ ○ ~ ○		円墳? 前方後方墳?	土抗	
30	134	釈迦山古墳	養老川			○			前方後円墳	粘土槨?, 割竹形木棺	
31	141	北旭台 74号~76号墳	養老川				○ ~ ○		方墳, 円墳	割竹形木棺, 土抗	
32	141	蛇谷遺跡方形周溝墓	養老川		○				方墳		■
33	144	番後台 081号方形周溝墓	養老川			○			方墳		■
34	144	姉崎天神山古墳※	養老川				○?		前方後円墳		
35	148	愛宕 4 号墳	小樺川		○ ~ ○				方墳	木棺直葬	
36-(1)	148	林遺跡Ⅱ, 1, 6, 12, 2 号	小樺川		○				方形周溝墓		■
36-(2)	148	林遺跡Ⅱ, 3, 4 号	小樺川		○				方墳		■
37-(1)	154	溝ノ口向台 002号, 005号	小樺川		○ ~ ○				方墳	土抗	
37-(2)	154	溝ノ口向台 9 号墳	小樺川		○				陸橋付方墳	周溝内土抗	
38	159	椿 3 号墳	小樺川			○			方墳	木棺直葬	
39	161	寒沢 12号墳	小樺川			○			方墳		
40	162	清水井 2 号墳	小樺川			○			方墳		
41-(1)	164	二又堀 1 号墳	小樺川			○			方墳		
41-(2)	167	二又堀 SK 009号	小樺川			○			方墳		■
41-(3)	167	二又堀 2~4 号墳	小樺川			○			方墳	木棺直葬	
41-(4)	167	二又堀 5~8 号墳	小樺川			○			方墳	木棺直葬	
42	171	尾畑台 1 号墳	小樺川			○			陸橋付方墳		
43	171	西ノ窪方形周溝墓	小樺川			○			方墳		■
44	171	上大城 2~7 号墳	小樺川			○			方墳	木棺直葬, 周溝内土抗	■
45	176	境 1 号墳	小樺川				○		円墳		
46	176	向神納里第 2 号	小樺川			○			方墳		
47	176	三ツ田台 SE 001号遺構	小樺川			○			方墳		■
48	178	金井崎 001, 002号	小樺川			○			方墳		■
49-(1)	179	田川 1 号	小樺川			○ ~ ○			方墳	周溝内土抗	■
49-(2)	179	田川 2 号	小樺川			○			方墳	中央土抗	■
50	179	文脇方墳 1	小樺川				○		方墳	周溝内土抗	
51-(1)	182	宮脇第 3 号墳	小樺川				○		円墳	割竹形木棺 2	
51-(2)	185	宮脇第 2 号墳	小樺川				○		方墳	割竹形木棺 2	

※は参考資料の古墳 備考欄の ■ は方形周溝墓と報告されているもの

※第4章での草刈Ⅳ期を含む

第4表 掲載古墳等一覧表(2)

遺跡番号	ページ	古 墳 名	水 系	弥生後期	草刈Ⅰ期	草刈Ⅱ期	草刈Ⅲ期	和泉式	形 状	主 体 部 構 造	備 考
52	187	浅間神社古墳※	小櫃川				○?		前方後円墳		
53	187	飯籠塚古墳※	小櫃川				○?		前方後円墳		
54	187	白山神社古墳※	小櫃川				○?		前方後円墳		
55-(1)	193	神田1号墳	小櫃川(蔵波川)			○			前方後方墳	周溝内土抗	
55-(2)	196	神田3号墳	小櫃川(蔵波川)			○			方墳	土抗	
55-(3)	196	神田2号墳	小櫃川(蔵波川)			○			前方後方墳	周溝内土抗	
55-(4)	196	神田1号方形周溝墓	小櫃川(蔵波川)			○			方墳		■
56-(1)	202	高部32号墳	矢那川		○				前方後方墳	木棺直葬, 周溝内土抗	
56-(2)	202	高部30号墳	矢那川		○				前方後方墳	木棺直葬	
57	207	西ノ入2号墳	矢那川			○～○			方墳		
58	207	大山台2001～2003	矢那川	○～○					方形周溝墓	中央土抗, 木棺直葬	■
59-(1)	211	庚申塚 A 021号	矢那川		○				方墳		■
59-(2)	211	庚申塚 A 020号	矢那川			○			方墳		
60	211	蓮華寺035号	矢那川			○			方墳		■
61	213	鳥越古墳※	矢那川						前方後方墳	土抗	
62-(1)	215	俵ヶ谷14号墳	矢那川(鳥田川)			○			方墳		
62-(2)	215	俵ヶ谷4号墳	矢那川(鳥田川)			○～○			方墳	土抗	
62-(3)	215	俵ヶ谷2, 13, 5, 11号墳	矢那川(鳥田川)			○			方墳	土抗	
63	222	手古塚古墳	矢那川(鳥田川)				○		前方後円墳	粘土槨	
64	223	駒久保6号墳※	小糸川						前方後方墳		
65	224	道祖神裏古墳※	小糸川						前方後方墳		
66-(1)	225	川島8～10号	小糸川		○				方墳		■
66-(2)	225	川島SX3, 6, 7号	小糸川			○			方墳		■
67	230	根方上ノ芝条理跡E-SX-1号	待崎川		○				陸橋付方墳		
68	232	横山7, 8号	夷隅川			○			方墳		■溝
69	233	能満寺古墳	一宮川			○			前方後円墳	木炭槨	
70	235	小林西之前1～4号	一宮川			○～○			方墳, 円墳		■周溝遺構
71	235	油殿1号墳※	一宮川			○～○			前方後円墳		
72	239	枯木合第1号古墳	南白亀川					○?	円墳		
73	240	大綱山田合新林01.02号	南白亀川		○				方墳		■周溝遺構
74-(1)	241	北野4号墳	作田川			○			円墳	木棺直葬	
74-(2)	243	北野5号墳	作田川			○～○			方墳		
75	245	島戸境1号墳	作田川				○		円墳	ロームブロック木棺直葬	
76	248	しゃくし塚古墳※	栗山川				○～○		前方後円墳		
77	249	瀬古古墳※	利根川下流				○?		前方後円墳		
78-(1)	253	阿玉台北A-7号墳	利根川下流			○			前方後方墳		
78-(2)	256	阿玉台北A004号	利根川下流		○				方墳		■周溝遺構
79	257	大日山1号墳	利根川下流			○?			前方後円墳	木炭槨	
80	257	堀竈浅間1, 2号墳	利根川下流			○			方墳	土抗	
81	261	大戸天神台古墳※	利根川下流						前方後円墳		
82	261	山之辺手ひろがり3号墳※	利根川下流					○	長方墳	木棺直葬4	
83	261	三之分目大塚山古墳※	利根川下流					○	前方後円墳		
84	265	上出島2号墳※	利根川中流				○～○		前方後円墳		
85	265	香取神社古墳※	利根川中流				○～○		前方後円墳		
86	268	上三ヶ尾宮前1, 3, 4号	利根川中流		○				方墳	中央土抗	■
87-(1)	271	大崎台第13号	印旛沼		○				陸橋付方墳		■
87-(2)	271	大崎台第9～12号	印旛沼		○				方墳	中央土抗	■
88-(1)	275	飯号作1号墳	印旛沼			○			前方後方墳	木棺直葬	
88-(2)	275	飯号作3, 4号墳	印旛沼			○			方墳		
88-(3)	279	飯号作2号墳	印旛沼			○			前方後方墳		
88-(4)	279	飯号作D6, 7	印旛沼			○			方墳	周溝内土抗	■
88-(5)	281	飯号作D8～19	印旛沼			○			方墳	周溝内土抗	■
89	281	白井南渡戸B第I, II周溝墓	印旛沼			○			方墳		■
90	281	棒作1号	印旛沼		○				方墳		■
91	285	ラサル山MB001～003号	印旛沼		○				方墳	中央, 周溝内土抗	■
92	285	井戸向M65～67号	印旛沼		○				方墳	中央土抗	■
93	287	公津原H9号墳	印旛沼			○			方墳		
		公津原H17号墳	印旛沼				○		円墳		
94	290	鶴塚古墳	印旛沼				○～○		円墳	土抗	
95	294	戸張一番割古墳	印旛沼		○				前方後方墳		
96-(1)	295	北ノ作1号墳	印旛沼			○			陸橋付方墳	粘土槨, 木炭床	
96-(2)	298	北ノ作2号墳	印旛沼			○			前方後方墳	粘土槨	
97	301	弁太古墳※	印旛沼					○?	前方後円墳	木棺直葬	
98	301	水神山古墳※	印旛沼					○?	前方後円墳	ローム槨, 木棺	
99	306	石揚1～4号	印旛沼		○				方墳	中央土抗	■
100	308	山田台1, 2号	印旛沼		○				方墳		■
101	308	神々廻宮前B001, 003～005号	印旛沼			○			方墳	中央土抗	■
102	311	戸張作1, 3～5号	都川			○			方墳	周溝内土抗	方形墳
103	311	星久喜第1, 2号	都川		○				方墳		
104-(1)	314	石神4号墳	都川			○			方墳		
104-(2)	314	石神2号墳※	都川					○	円墳	割竹式木棺	

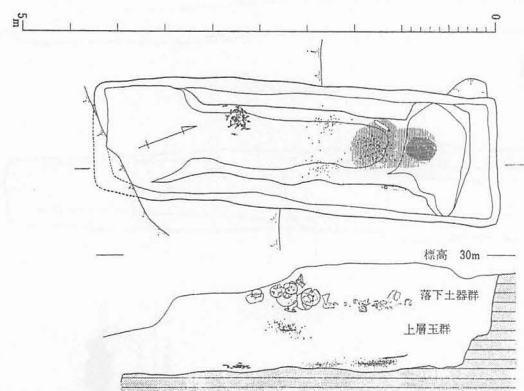
第5表 玉類出土状況

古墳名	時期			形状	勾玉					管玉					小玉、丸玉				棘玉	白玉	土玉	その他											
	草刈Ⅰ期併行	草刈Ⅱ期併行	草刈Ⅲ期併行		凝土	メ灰	ガラノ	滑石	水水晶	琥珀	硬玉	不透明	頁岩	蛇文	碧玉	ガラス	滑石	凝灰	緑色凝灰	鉄石	珪石		ガラス(濃青)	ガラス(薄青)	銅	滑石	琥珀	水晶	琥珀	滑石	土		
大山台2002(弥生後期)				■						1												41											
大山台2003(弥生後期)				■																		8											
神門5号墳	○			陸橋付円墳																		3		2									
高部32号墳	○			前方後方墳																		218											
愛宕4号墳	○			方墳																			48										
小田部古墳	○			陸橋付円墳										2		1?							64										
神門4号墳	○			陸橋付円墳	3					73+					2	418																	
神門3号墳	○			陸橋付円墳										11									103										
滝ノ口向台9号墳	○			陸橋付方墳																												1	
大崎台13号	○			陸橋付方墳																												3	
林Ⅱ4号	○			■								124																					
ヲサル山 MB 001	○			■							1												44										
ヲサル山 MB 002	○			■											1																		
石揚1号	○			■																			2										
石揚3号	○			■															1	1			32										
石揚4号	○			■																			11										
西ノ入2号墳	○	○		方墳									1																				
神田1号墳		○		前方後方墳				2								7																	
俵ヶ谷4号墳		○		方墳	1					14					68?																		
鳥越古墳				前方後方墳											9								360			21							
椿3号墳		○		方墳																1	1		2	14									
飯号作1号墳		○		前方後方墳																		3											
北ノ作1号墳		○		陸橋付方墳																												4	
北ノ作2号墳		○		前方後方墳									3																			5	
大日山古墳		○		前方後円墳											1						1	8											
草刈24号		○		■	1								1	1																			
草刈26号墳		○		■							3						3																
馬ノ口2号		○		■						1	2																					1	
上大城2号		○		■																												6	
上大城5号		○		■																												4	
上大城7号		○		■																												1	
二又堀8号		○		方墳																		3											
俵ヶ谷5号		○		方墳						1																							
飯合作D09		○		■		1																1											
戸張作1号		○		方墳																		1											
草刈B方墳192号		○		方墳										3																			
北野5号墳		○	○	方墳						2								8				58				1							
手古塚古墳			○	前方後円墳								1					5															石剣、車輪石他	
新皇塚古墳			○	前方後方墳?					1	1							98															石剣	
大厩8号墳			○	方墳													5															1	
大厩浅間様古墳			○	円墳			2	1		8		55?					13	31			21		3	9							石剣		
持塚4号墳			○	方墳			2										16							7	15								
海保第3号墳			○	前方後方墳?			2							14								32										2	
釈迦山古墳			○	前方後円墳								7																					
宮脇第3号墳			○	円墳																		56											
鶴塚(～和泉期)			○	円墳																		17								181			
上出島2号墳(～和泉期)			○	前方後円墳	2(丁字頭)																												
島戸墳1号墳			○	円墳			5			2	4	3					36					204				2	4						
下鈴野01号墳(和泉期)				円墳					1																						174		
弁天古墳(和泉期)				前方後円墳																											253	石枕、立花他	
水神山古墳(和泉期)				前方後円墳											1	1						280											

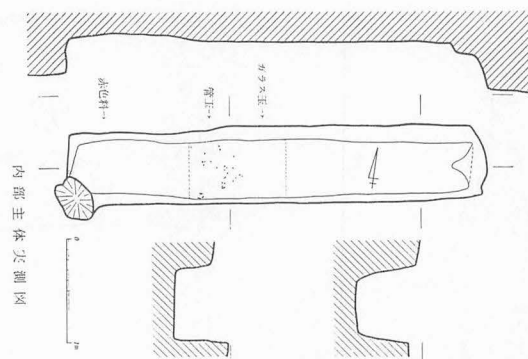
■ は方形周溝墓として報告されたもの

第6表 金属製品出土状況

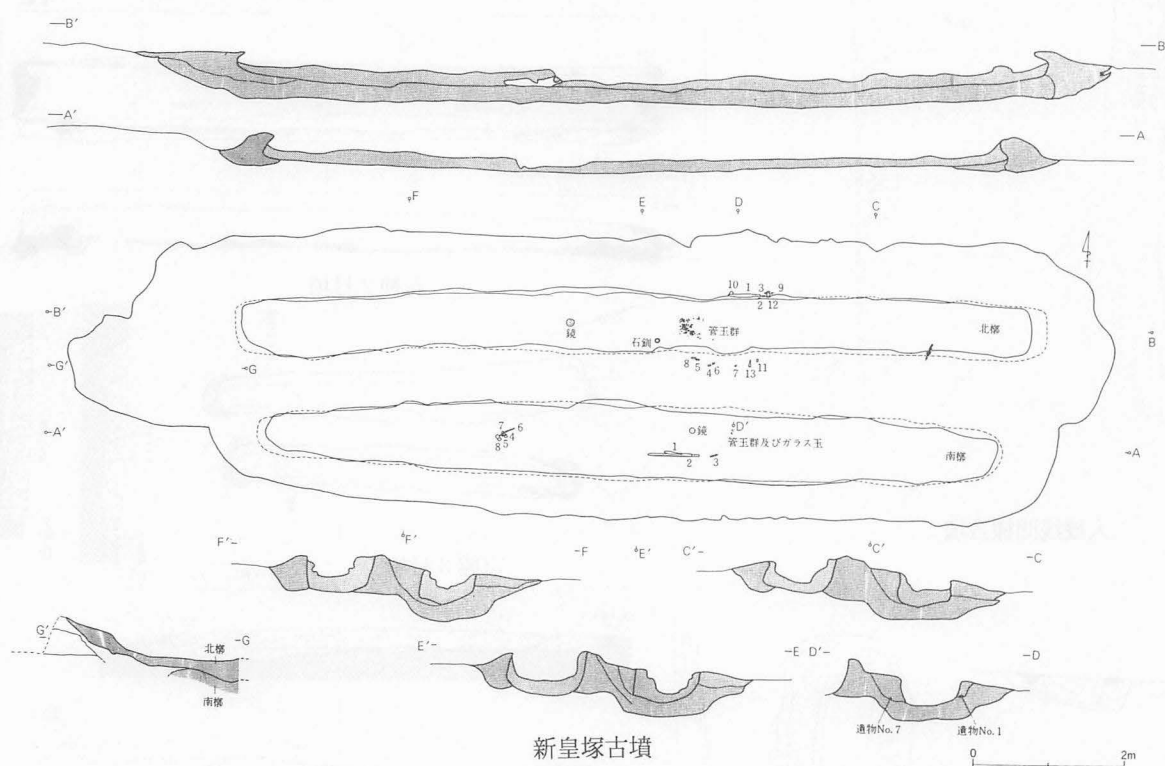
古墳名	時 期			形 状	鏡	銅 鍔		鉄 鍔						鉄 製 品								
	草刈Ⅰ期併行	草刈Ⅱ期併行	草刈Ⅲ期併行			無茎	有 茎	腸扶柳葉式	柳葉式	腸扶柳葉式	多孔平根式	定角式	平根式	柳葉式	鳥舌式	その他	槍	鉄剣(短剣)	鉄剣	刀子	農工漁具	その他
神門5号墳	○			陸橋付円墳					2									1				
高部32号墳	○			前方後方墳	半肉彫四獣鏡							1				2					2	
愛宕4号墳	○			方墳													1					
神門4号墳	○			陸橋付円墳						2					39	1		1			1	
神門3号墳	○			陸橋付円墳												1		1			1	
滝ノ口向台9号墳	○			陸橋付方墳				1											1		1	
高部30号墳	○			前方後方墳	二神二獣鏡											2						
川島SX6号	○			■																1		
阿玉台北A004号	○			■																	2 不明	
大崎台10号	○			■														2				
ヲサル山MB001	○			■																	鉄剣	
石揚2号	○			■													1					
石揚4号	○			■													1					
俵ヶ谷4号墳		○		方墳	振文鏡																	
鳥越古墳				前方後方墳	方格規矩鏡																不明	
椿3号墳		○		方墳		1	1									1	1					
能満寺古墳		○		前方後円墳			6															
飯号作1号墳		○		前方後方墳		2(混入?)																
北ノ作1号墳		○		陸橋付方墳				1				3										
北ノ作2号墳		○		前方後方墳							1											
大日山古墳		○		前方後円墳														1	2		2	
二又掘8号		○		方墳																	1	
神田3号		○		方墳											1							
俵ヶ谷5号		○		方墳																	1	
石神4号		○		方墳		1(混入?)																
北野5号墳		○	○	方墳																		
手古塚古墳			○	前方後円墳	三神三獣獣帯鏡 四獣鏡		30				30+							1	6	1	直刀	
新皇塚古墳			○	前方後方墳?	珠文鏡, 内行花文鏡				1									2	6	10	直刀	
大厩浅間様古墳		○		円墳	珠文鏡							2					1		1		3	
持塚4号墳		○		方墳														1	1		3	
海保第3号墳		○		前方後方墳?									5					3				
釈迦山古墳		○		前方後円墳										長三角					1			
宮脇第2号墳		○		方墳																	銅剣	
宮脇第3号墳		○		円墳															1			
上出島2号墳(～和泉期)		○		前方後円墳								6	1	1				1				
島戸境1号墳				円墳	小形倭鏡4																	
下鈴野01号墳(和泉期)				円墳																1		
弁天古墳(和泉期)				前方後円墳														1	1			
水神山古墳(和泉期)				前方後円墳																2		



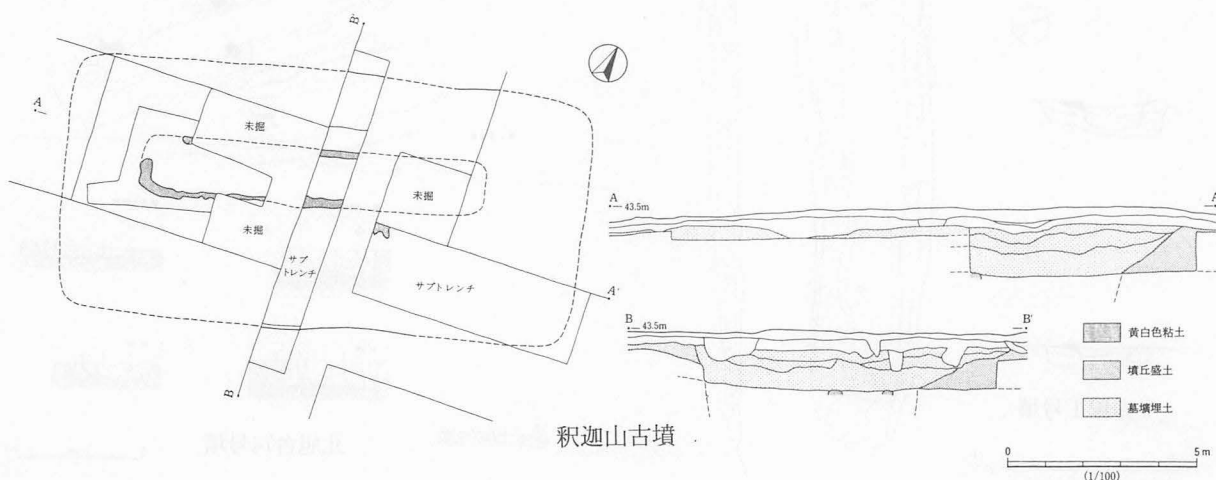
神門4号墳



小田部古墳

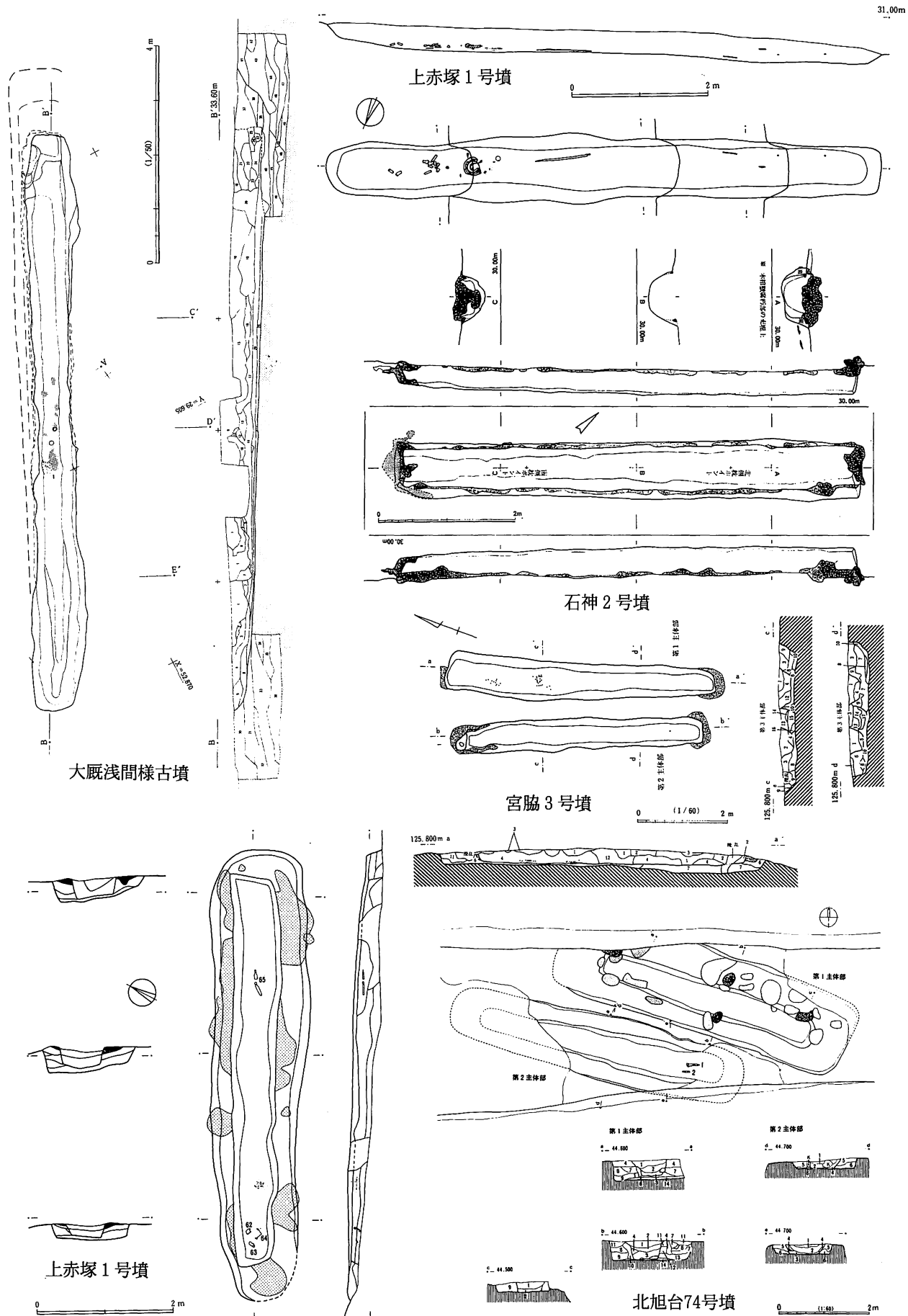


新皇塚古墳



釈迦山古墳

第249図 主要古墳主体部(1)



第250図 主要古墳主体部(2)

第4章 編年的研究にみる前期古墳の展開

第1節 千葉県における古墳編年研究

1. 古墳の編年的研究と問題点

千葉県域の前期古墳といえ、戦後まもなくの1947（昭和22）年に発掘調査され大塚初重氏によって報告された能満寺古墳¹⁾や、1959（昭和34）年に発掘調査され、金子浩昌氏・中村恵次氏・市毛勲氏によって報告された北ノ作1号墳²⁾は、古墳時代及び古式土師器研究に欠かすことのできない資料として、早くから知られてきた。その後も新資料が知られるたびに、編年的研究は検討され、現在まで積み重ねられてきている。それら個別的検討と諸調査の経緯について述べるだけでもかなりの紙数が必要であり、土師器研究史等にも深く触れなければならないが、今はその用意がない。ここでは、むしろそれら先学の成果をもとにした、最近の網羅的な古墳編年研究をとりあげ、課題を明らかにしたい。

以下に紹介する古墳編年表は古墳の築造順序をわかりやすくまとめた表であり、「首長墓（首長）系譜（系列）」等の日本独自の研究をはぐくんできた。それには長い研究の歴史があるが、全国的に比較することを可能にした1985年の『季刊 考古学』10号以降、盛んに作成されるようになる。その後、大王墓と地域首長墓との動向の一致が初期国家的な政治体制の成立を証明する³⁾、というような「首長墓系譜」研究の新局面を生み出した一方で、表の作成自体が研究の目標であるかのような錯覚をも生じた観がある。

一地域の編年表を作成するためには、遍く詳細な古墳の把握が必要とされる。個人研究者には負担が大きすぎる。編者の意図に合わせた受動的な研究例が多くなるのは、完成されたものを提示することが至極困難であるからにはほかならない。それでも成果を上げてきた先学に対し深い敬意を表さずにはいられない。

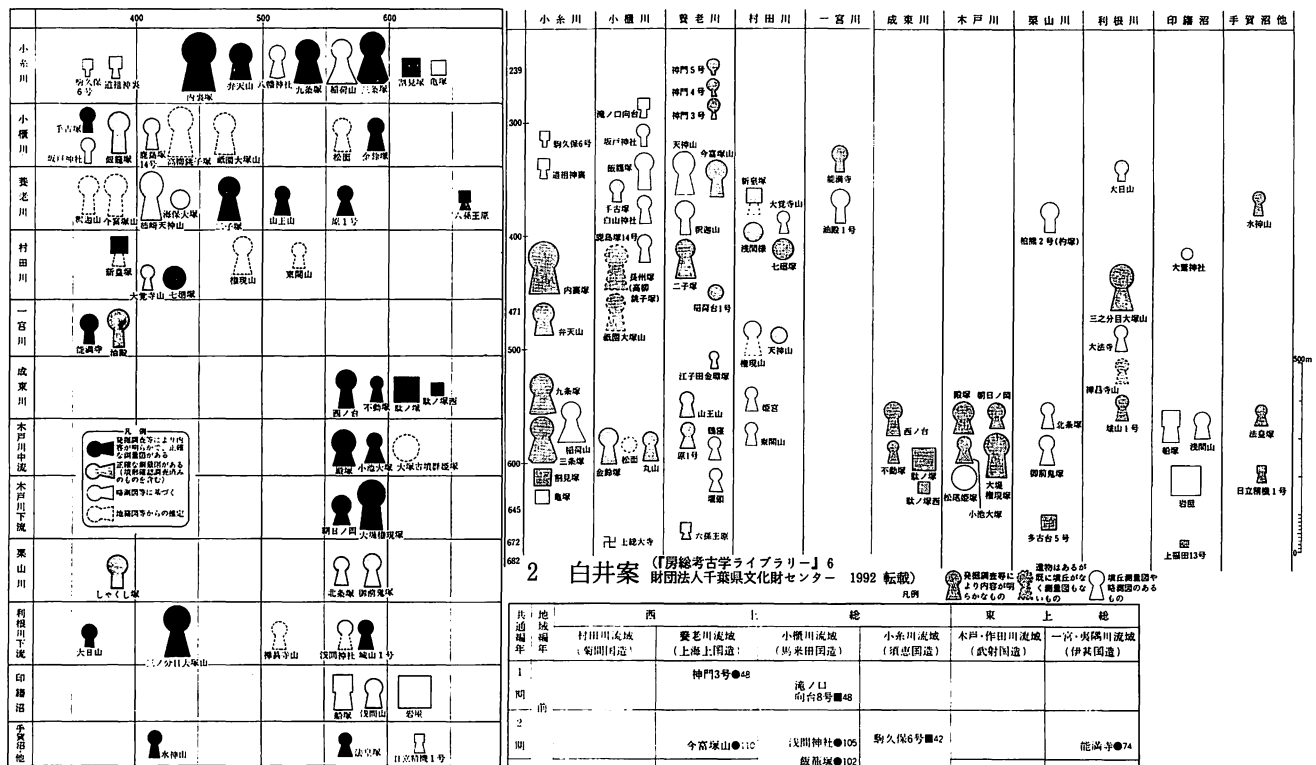
千葉県における古墳の詳細な把握という点でひとつの到達点を示したのは、沼沢豊氏⁴⁾である。氏は河川流域毎に主要な古墳の把握を試み、文献上にみる小国造の勢力範囲と対比させて編年案（第251図－1）を示した。この把握が膨大な基礎作業の上になされたことは『千葉県古墳詳細分布調査報告書』（1990）でも扱いきれなかった詳細な情報が盛り込まれていることから知られ、確度の高いものとなっている。

白井久美子氏⁵⁾は墳丘長100m以上の古墳がいつどこで築かれたかを示す資料として編年表（第251図－2）を作成した。前期から後期まで大古墳が集中する上総東京湾岸に対し、後期に大古墳を築きはじめる太平洋岸というような、地域によって大きな相違のあることを強調している。

『前方後円墳集成』において、下総地域と上総地域をそれぞれ担当した車崎正彦氏⁶⁾と小沢洋氏⁷⁾は、前方後円（方）墳という古墳の形を基準とし、円・方墳は補助的資料として編年表（第251図－3）を提示した。前方後円墳数第一位の千葉県では、とくに下総地域で後期に小型前方後円墳の事例が爆発的に増加し⁸⁾、もはや前方後円という墳形はさほど特別な存在ではなくなる実態をよく説明している。なお、『前方後円墳集成』では畿内編年を基軸とした統一の時期細分案（10期編年）を採用している。研究者によってニュアンスが異なるが⁹⁾、おおむね1期から4期までが前期、5期～7期が中期に相当する。

梶山林継氏¹⁰⁾は墳丘長「50m以上の前方後円墳を中心に注目すべき条件を持つもの」を選んで編年表（第252図－4）を示した。50mというのは経験的な基準であろう。なお、氏は文化伝播論的に古墳が築かれるようになるさまを述べて、論を結んでいる。

第4章 編年的研究にみる前期古墳の展開



1 沼沢案

(『古墳時代の研究』11, 雄山閣出版 1990 転載)

3 前方後円墳集成案（『前方後円墳集成』）

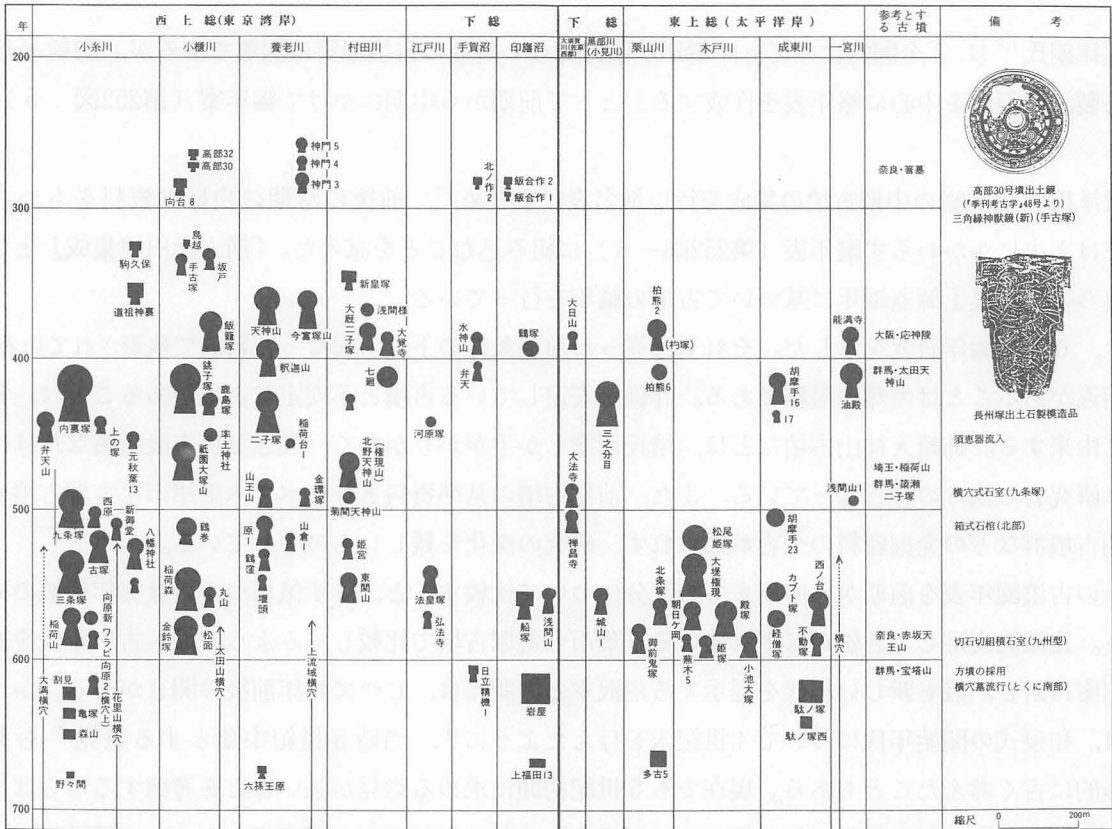
東北・関東編 山川出版社 1994 転載)

下総 車崎案

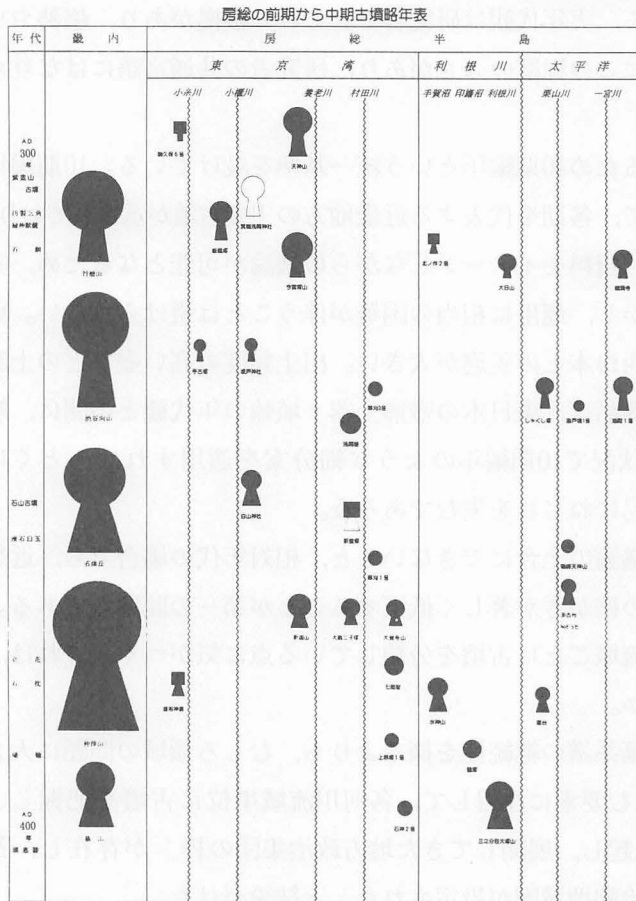
	太平洋沿岸	利根川下流域	印旛沼周辺	千代田周辺	利根川中流域	荒川流域	東京湾沿岸
1期				千代田番地1号			
2期		阿玉台北A 7号●26	飯合作2号●30 飯合作1号●25	北ノ作田号●32			
3期	柏路1号○50 柏路8号●72						
4期	滝の台●58 多古台No.8-6号●55	大日山1号●54		水神山●69	香取神社●71 上出島2号●86		大覚寺山●62
5期		三之分目大塚山●123	鶴塚○44				上赤塚1号○31 石神2号○30
6期		山之辺手ひろがり3号○20 岩崎天神台○29 (大戸天神台●60) 大戸宮作1号○19		有犬●32			上越塚○54 石神1号○?
7期	多古台○20 小川台1号○28	占野台3号●28					
8期		向田4号●32	烏山2号○27 狐塚32号○26	花井井大塚○20 金塚○20		河原塚1号○26	
9期		押込寺山●60? 舟塚原●54	南羽鳥高野1号●48		林愛宕塚○35 市之代3号●70		
10期	北条塚3号●74 小川台5号●30 坂並白貝18号●30 御前鬼塚●105	浅間神社●70 富田1号●39 富田2号●48 富田3号●41 城山1号●68 城山5号●51 城山6号●42 大正寺●60? 大相田坂ノ上140号	道作15号●45 吉高山王●29 船塚●85 天王塚●63 南羽鳥高野2号●28 竜角寺111号●70 狐塚●49	日立市南側1号●45 我孫子第四小字 日立南側2号●30 子ノ神14号●30 高野山4号●26 高野山1号●36	日沼無原塚●48 東澤井9号●21 弘法寺●43 法泉塚●55 明声●40 備中懸塚●48 古山八幡塚●50	日沼無原塚●48 東澤井9号●21 弘法寺●43 法泉塚●55 明声●40 備中懸塚●48 古山八幡塚●50	仁戸名2号●42 横名崎1号●45 人形塚●41 中原V号●25 中原IV号●35 中原III号●33

第251図 古墳編年表集成(1)

第1節 千葉県における古墳編年研究



4 梶山案 (『全国古墳編年集成』雄山閣出版 1995 転載)



房総中期古墳編年表		1998.3.13		
	前方後円・後方墳	円墳・方墳(上・中)	(下・長・変形)	
前期	吉手古塚(60)			
380	夏新皇塚(60)	■宮脇2号	■埴塚4号墳(29)	
0期	霊白山神社(89)			
390	霊根淵山(93)	●宮脇3号?	■大塚7号 ■草刈136号 ●海保3号(29)	
1期			●鵜保(44)	
470	霊豊浦大塚(123)	■大塚3号 ■草刈990号 ●草刈331号 ●草刈274号 ●草刈750号	■北旭台74号 ●七廻塚(54) ●狐塚12号 ■手ひろがけ3号 ●兵ノ塚(45)	
2期	霊水神山(69)			
420	霊杵御鉢子塚(130)	●塚原62号 ●塚原72号	●上塚原1号(31) ●行神2号(25)	
3期	霊布施井天(32)	●四冢作1-1号 ●高砂1号?	●鵜崎天神台1号(29) ●広ノ台3号(28)	
TK73	霊内裏塚(144)	●西ノ根谷3・6号		
440		●八重原1号(37) ●門門 ●池端 ●東山16号 ●鹿島塚5号(27)	●清見台A4・A8・B2号 ●祝崎1・2号 ●四冢作1-1号 ●西ノ根谷4号 ●雨谷1号	
TK216 ON46 660	霊埴崎子塚(103)		●向神納里4号 ■安須2号 ●草刈191号 ●広ノ台5号 ●小川山1号(29) ●薬山掘出16号 ●多古台 *大寺山1号洞穴	
5期	霊祇園大塚山(100)	●富士見台2号 ●元秋葉台32号 ●八重原2号 ●戸崎66-67-83号 ●塚原20-35-36-51号 ●野堤2号 ●鹿島塚2-6・7・20-23号 ●坂ノ谷2号	●愛宕1・2・3・5・6号 ●寒沢1号 ●向神納里3・5・8号 ●大竹12-13号 ●富士見塚(25) ●東間部多1号(27) ●堀母屋1号 ●塚原3号(35) ●奥山135号 ●草刈104~111号	●仁戸名3号 ●仁戸名6号 ●桑柄1号(35) ●花野井大塚 ●金塚 ●古高渡(40) ●狐塚29・32号 ●天王山塚5号 ●山崎2号 ●瑞雲天神台2・3号 ●宝塚院1号
TK208 TK23	霊上野塚(45)	●境1・2号	●横山1号 ●宝塚院2号	
490	後1期	●大山台29号		
TK47				

 = 前方後円墳
 = 前方後方墳
 = 帆立貝形前方後円墳
 = 25m以上の円・方墳
 = 25m未満

6 小沢案 (『君津郡市文化財センター研究紀要』Ⅶ
財団法人君津市文化財センター 1998 転載)

5 永沼案(『第3回東北・関東前方後円墳研究会大会 シンポジウム前期古墳から中期古墳へ』1998 転載)

永沼律朗氏¹¹⁾は、「全国的にみても、編年が明確でない時期の古墳編年は困難であるが、房総半島に多い滑石製品の副葬を中心に略年表を作成する」として前期から中期にかけて編年案（第252図－5）を示した。

小沢洋氏¹²⁾は房総の中期古墳の集成を行い地名表にまとめ¹³⁾、前後の時期の良好な資料をもつ古墳については大小にかかわらず編年表（第252図－6）に組み込むことを試みた。『前方後円墳集成』とは異なり、自らの千葉県土師器編年に基づいて古墳の編年を行っている。

以上、6つの編年研究を示した。それぞれ違った前提条件の下に、異なった目的で執筆されているので、表に相違があることは当然の帰結である。評価が安定している古墳と不安定な古墳があることは、資料の多寡に由来する。姉崎天神山古墳などは、墳丘形態しか手がかりがなく、大きな前方後円墳だけにその処遇は研究者の悩みの種となっている。また、前期古墳の基準資料となるべき木更津市手古塚古墳や市原市神門古墳群などの発掘資料の全容が知られず、研究の深化を難しいものとしている。

6つの古墳編年表を前期から中期までの部分について比較すると、まず気がつくのは実年代観の相違であろう。比較的安定した評価がなされている千葉市七廻塚古墳で比較してみよう。最も古い年代を提示する永沼案に対し、最も新しい年代を提示する沼沢案との間には、じつに40年前後の開きがある。かつて沼沢氏は、和泉式の開始年代について4世紀末を与えたように¹⁴⁾、当時5世紀中葉とする意見¹⁵⁾もある中で積極的に古く考えたこともある。現在でも5世紀初頭に求める意見が強いことを考慮するならば¹⁶⁾、千葉県で考えられている実年代は相対的に古い傾向があるかもしれない。研究者によって、地域によって、さらに開きは大きいとみるべきであろう。もちろん、実年代観は研究者それぞれの根拠があり、趨勢や平均値で求めるべきではない。ここでは、実年代観にこの程度のズレがあり、研究者の共通言語にはなりえていないことのみを確認しておく。

『前方後円墳集成』では、こうした混乱を避けるため10期編年という統一基準を設けている。10期編年は、埴輪、副葬品、棺の構造等を指標とした区分で、各期を代表する近畿地方の主要古墳が示されており、そこに地方の古墳を当てはめるというものである。資料をイメージしながらの議論が可能となるため、実年代よりはるかに共有しやすい時間軸である。しかし、運用に相当の困難が伴うことは避けられない。東日本では副葬品や埴輪資料に乏しく、埋葬施設は西日本との差違が大きい。出土頻度の高い壺などの土師器は、指標に入っていない。しかも、鉄鏃等の副葬品は、東日本の壺形土器・埴輪の年代観との間に、解決されていないズレを有している¹⁷⁾。このような状況で10期編年のような細分案を適用すれば、とくに前期から中期の狭間にあたる3～5期において、容易にねじれを生むであろう。

このように、古墳編年に実年代を用いた場合は議論の土台にできないこと、相対年代の場合でも、近畿地方の細分案を適用することは障害が多く、比定の確かさが著しく低下することが第一の問題点である。

次に、6つの研究例のなかで5例までが河川の流域ごとに古墳を分類している点に気がつく。これは、全国的な傾向ではあるが、果たして有効であろうか。

地域区分を唯一理論づけている沼沢氏は、首長墓系譜の継続性を探るよりも、むしろ領域の問題に大きな関心を寄せ、「灌漑水利」という政治的結合を生む要素に注目して、各河川流域単位に古墳を把握しようとした。そして、「基本的に各河川流域単位に成起し、展開してきた地方政治集団の枠」が存在し、最終的にそうした「伝統的地域圏をこえて2つの政治的地域圏が設定された」と結論づけた。

千葉県は茨城県と同様に文献上から小国造の存在が知られ、それらが上総・下総等の律令国へ編成され

ていく過程についての問題を抱える。地域史的課題として領域論をとりあげたことは卓見である。ただし、第251図-1のように各流域ごとの大型古墳の消長は多様であり、流域ごとに展開したというにはやや抵抗を感じる。氏自身も本文中において政治的勢力の拡大や縮小について言及している。

栃木県那須地域から茨城県北部を横断する那珂川の場合、上流の那須地域側と下流の茨城県側を一緒に扱う研究者はまずいない。それはなぜか。那珂川は上流域と下流域が山地で隔てられることから、地形的な区分が容易である。これが区分の根拠であろう¹⁸⁾。このように、単純に河川流域を同一地域とはみなさない場合がある。

微地形の連続である関東平野において、那珂川流域等と同様の区分根拠を示すことは困難である。とはいえ、千葉県の養老川・小糸川・小櫃川流域など、山地を含む上総丘陵部分ではいくつかの地形による隔離がみられる。とくに小櫃川流域では、古墳分布が上・下流域で二分するようにもみえる。それを越えて河川流域＝「伝統的地域圏」と認めるには、自然地理以外の人文的要素を加味して検討する必要がある。逆に、領域が河川流域を越える場合は人文的要素による分析でしか証明しえない。

このように、前提となる地域区分について議論が尽くされていない点が第二の問題点である。大型古墳等の築造場所を把握するだけの目的であれば、便宜上いかなる区分でも差し支えない。当時の政治的・社会的領域が河川に規制を受けやすいと私も考えるので、のちの行政区分を援用するより河川毎のほうが遙かに有益である。しかし、研究の精度を高めるには、前提の再検討が必要とされてくる。

第三の問題点は、これも前提の問題であるが、編年表に組み込む古墳の基準が研究者によってまちまちであったり、曖昧であったりする点である。

白井氏は文中で墳丘長100m級の前方後円墳をとりあげ、大型古墳が築造される時期と地域の変遷を示した。梶山氏は墳丘長50mを基準としており、文化論的ながらほぼ同様の目的を達した。『前方後円墳集成』では前方後円という墳形を基準として、その時間と空間を考慮した分布図を示した。これらが、もし仮に首長墓系譜論等にまで踏み込むときは、おのずと基準は違うものとなるであろう。最も意義深い論を展開した沼沢氏の場合においては、基準は単純なものではありえず、個々の古墳の詳細な記述で選択の根拠を示したが、これには大変な資料の積み重ねが必要とされた。詳細な記述すらないままに「主要古墳」編年表とのみ記される場合には、結論を恣意的に導く可能性があり、つねに目的にあわせて資料の範囲が提示される必要がある。

以上、時間軸の問題、地域区分の問題、扱う資料の範囲という三つの問題について考えてきた。これらは千葉県にとどまらず、普遍的な問題点である。

2. 本章の課題

千葉県内の前期古墳を対象とした編年的研究が今回の課題である。古墳時代を通じて変遷を追う必要がある首長墓系譜研究は言の及ぶところではない。では、どのような方向性をもつべきか、三つの問題点に学びながら、以下に示していくことにする。

時間軸の問題は、1・2章ですでに示したように、千葉県の古墳で圧倒的に出土頻度が高い、土器を軸に据えた。この方法はすでに小沢氏もとっている。新たな編年案を用いることを申し合わせたのには、段階設定の細かい編年案は正当な説であっても運用が困難であるという既述の理由があるほか、次の三つの理由がある。

- 1) 県外の案では地域差が運用面での障害となること
- 2) 小型土器群や器種構成の変化を軸とした編年は広域で通用するが、偶然に小型土器群の欠落した資料では運用に著しい支障を来すこと
- 3) 古墳出土土器の構成や造りは、集落等出土の土器と異なる可能性が高いと考えたこと

今回必要とされる土器編年は、古墳の大小を問わず広く十分な運用が可能でなくてはならない。それではなくては後述の分析に耐えないのである。そこで、地元の古墳出土土器を使用し、できるだけ段階設定の少ない、大掴みでわかりやすい案を提示するよう申し合わされた。また、地元の土器のなかでも出土頻度が高く、地域性が強い、したがって連続的に変化したであろう、甕を軸にすることも申し合わされた。

甕の著しい地域性を考慮すれば¹⁹⁾、1)、2)の理由について理解いただけるであろう。問題は3)である。これは十分な共通認識を得られているとはいえないので、新たに検討しておく必要がある。

また、前期古墳の年代推定では副葬品の組合せが重要な要素であり、なかでも鏡、石製腕飾類、琴柱形石製品、鉄製武器・武具は研究史が厚く、つねに相互の整合性が検討されてきた。それゆえ、土器編年を副葬品の編年に優先させる考え方には疑問を感じざるをえない。普遍的存在ゆえに資料的優位にある土器編年といえども、観点の相違から異なる仮説が成立しうるのに加え、現状は地域差が大きく、他地域とのクロスデーティングもなかなか困難である。このような土器編年をより有効にし、広域で機能できるようにするために、金属器や石製品などとの相互チェックは不可欠である。

副葬品のなかで、3例の短冊形鉄斧が存在することは特筆される特徴であるが²⁰⁾、通時的な編年資料にはならない。鏡は高部古墳群の舶載鏡²¹⁾や、木更津市手古塚古墳の仿製三角縁神獸鏡と四獸鏡のほか、多数の小型仿製鏡²²⁾が知られているが、それぞれ種類が異なるため個別の年代観を示すのが限界である。石製腕飾類では、手古塚古墳や市原市新皇塚古墳・大厩浅間様古墳例の碧玉製石釧と、草刈3号墳と千葉市七廻塚古墳例の滑石製の特殊な大型品があり、後者の文様に新要素を含むことが指摘されたが²³⁾、車輪石の形状をもつ点で類例がなく、通常の石釧との関係を明らかにするのは困難である。

鉄鏃・銅鏃は、ある程度出土例に恵まれている。後述のように茨城県南部地域も参考に加えれば、一定の編年案が提示できる。これにより古墳編年研究の一指標を提示し、土器との整合性をはかることも可能であろう。

そこで、古墳出土土器の特性、および副葬品編年（おもに鏃）との整合性については、第2節で整理を試みる。

二つ目の地域区分の問題については、前期という限られた時期の分析であり、領域の変遷問題を深く追究することは今回の主眼ではないので、集成は河川流域ごとに行った。ただし、第3節の、前方後円墳の墳丘形態から首長の関係を探る際には、より広域な地域を対象とした検討方法をとった。

三つめの資料の範囲という問題は、研究目的によって決まる。本紀要の資料集成という側面を生かそうとすれば統計的处理に力点をおくことになるが、同じように中期古墳を集成して編年を試みた小沢氏の研究を参考にしながら主眼とすべきところを示したい。

小沢氏は他と異なり、首長墓と目される大型古墳とそうではない小型古墳と一緒に編年表に組み込んでいる。こうした試みは以前からもあるが、大型古墳の資料がないので表中の空白を埋めるために小古墳をさし挿んだ程度のものが多い。氏の研究は、認識しうる古墳をすべて分析の対象としたうえで、各時期における「古墳の構成」（古墳に表象された身分がどの程度重層的な構成をしているか）を描こうとした点

に、方向性が感じられる。

古墳からみた階層構成について、地域の実態を視野に入れながらモデル化する研究は、和田晴吾氏²⁴⁾によるものである。「古墳の構成」も氏の用語である。社会構成とも、政治的結合関係とも受け取れるそのモデルは、実態をなかなか表現しづらい首長相互の関係を如実に表現することに成功した。古墳は身分の表象、という考え方を是とする場合は、古墳時代当初からの秩序の完成を唱える意見が強かったのに対し²⁵⁾、古墳時代の各期ごとに構成が変化することを描こうとした点に、「古墳の構成」の特徴がある。

古墳の墳形や規模を代弁者として、階層モデルを描こうと考えていた研究者は、少なくなかったはずである。各地の事例研究が即座に反応したのはその表れと考える²⁶⁾。小沢氏も研究の流れをとらえ、千葉県域における事例研究に踏み切ったのであろう。

「古墳の構成」は、被葬者・造営主・造営集団のいずれの関係なのかが曖昧であるものの、社会構成の把握は古墳時代研究における主要課題の一つである。第3節では古墳のかたちや規模の統計的处理を通じて、すこしこれを検討したい。

注

- 1) 大塚初重「上総能満寺古墳発掘調査報告」『考古学集刊』1-3 1949
- 2) 金子浩昌・中村恵次・市毛勲「千葉県東葛飾郡沼南村片山古墳群の調査」『古代』33 1959
- 3) たとえば、都出比呂志「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』22史学篇 1988など
- 4) 沼沢 豊「5-2千葉」『古墳時代の研究』11 地域の古墳Ⅱ 東日本 雄山閣出版 1990
- 5) 白井久美子「第五章 畿内政権の伸長 第一節 巨大古墳の築造」『房総考古学ライブラリー』6 古墳時代(2) 財団法人千葉県文化財センター 1992
- 6) 車崎正彦「第8章 下総」『前方後円墳集成』東北・関東編 山川出版社 1994
- 7) 小沢 洋「第9章 上総」『前方後円墳集成』東北・関東編 山川出版社 1994
- 8) 下総の表ではできるだけ墳丘長の大きい例を抽出しているが、群集墳の中にさえ混じって存在する前方後円形小墳と明確に区分することは、発掘を経ずには困難を極める。
- 9) たとえば、田中新史「古墳時代中期前半の鉄鏃(一)」『古代探叢』IV滝口宏先生追悼考古学論集 1995では、前方後円墳集成で4期の指標とされた長柳葉形鏃(田中氏によると鳥舌形鏃)や二段逆刺鏃、短頸広身鏃は中期前半を代表する鉄鏃であるとしており、この場合4期は中期ということになる。1998年の第3回東北・関東前方後円墳研究会大会における大方の意見では、東北・関東においても4期と5期に変革が見いだせるとされ、前期と中期とを分ける目安とされた。ただし、4期を前後二時期に分ける必要があることも提案された。
- 10) 梶山林継「上総・下総」『全国古墳編年集成』雄山閣出版 1995 なお、梶山氏は『季刊 考古学』10 1985でも千葉県の編年表を担当している。包括的な表としては先駆的であるが、このときは残念ながら編年根拠等の説明や歴史的評価を示すのに十分な紙数がなかった。
- 11) 永沼律朗「千葉県 前期から中期古墳へ」『第3回東北・関東前方後円墳研究会大会 シンポジウム前期古墳から中期古墳へ』1998
- 12) 小沢 洋「上総における古墳中期土器編年と古墳・集落の様相」『君津都市文化財センター 研究紀要』Ⅷ 財団法人君津都市文化財センター 1998
- 13) 小沢氏は、中期のみを扱ったのではなく、中期の特性を描くため前期大型古墳出現以降の、古墳の展開を扱った。
- 14) 『東寺山石神遺跡』財団法人千葉県文化財センター 1977
- 15) 玉口時雄「土師器」『新版考古学講座』5 1970
- 16) たとえば、坂野和信「和泉式土器の成立過程とその背景-布留式後期土器との編年的検討」『埼玉考古学論集』埼

玉県埋蔵文化財調査事業団 1991 など。

- 17) 日高慎・田中裕「上出島2号墳出土遺物の再検討」『岩井市の遺跡』2 岩井市史編さん委員会1996において、実年代の問題として取り上げた。すなわち、従来の考え方によれば、同古墳出土の壺形埴輪は5世紀前葉に下る最新段階のものだが、柳葉形鉄鏃は4世紀末以前に遡るというものである。個々の遺物に付与された実年代観は事実上、他の遺物との併行関係を代弁するものである。そこにズレがあるということは、実年代の問題にとどまらず、複数の遺物を組み合わせて古墳の築造年代を考えると、ズレの部分が古墳の前後関係にかたちを変えてしまう危険がある。
- 18) 地域区分の根拠に律令国境を用いることには慎重を期す必要がある。律令国などの行政区分が成立する歴史的経緯を明らかにするには、それ以前の領域（ここでは首長を中心とした地域結合体の大きさをさす）の変遷を探求する必要があるので、律令国成立以前を研究するのに、領域論に関わる部分で律令国域に沿って研究するのは歴史的遡及法としても容認できる種類のものとはいえない。
- 19) 田中 裕『『S字甕』終焉のころの関東』『第7回東海考古学フォーラム三重大会 S字甕を考える』東海考古学フォーラム三重大会事務局 2000
- 20) 大日山3号墳木炭槨、能満寺古墳木炭槨、滝ノ口向台9号墳旧表土上で出土している。
- 21) 高部32号墳では破鏡（斜縁四獣鏡）が、31号墳の破砕された斜縁二神二獣鏡（類例のない五珠銭文付き画文帯をもつ）が出土した。
- 22) 『研究紀要』17 財団法人千葉県文化財センター 1996で集成されているので参照されたい。新皇塚古墳の内行花文鏡と珠文鏡、大厩浅間様古墳の珠文鏡、島戸境1号墳の珠文鏡・内行花文鏡・捩文鏡2面、俵ヶ谷4号墳の捩文鏡などが公表されている。俵ヶ谷4号墳の捩文鏡は中期前半まで下る可能性が高い。これら千葉県前期古墳出土「倭鏡」の変遷については、車崎正彦「倭鏡雑感」財団法人山武郡市文化財センター『島戸境1号墳』山武町教育委員会 1994を参照されたい。
- 23) 杉山晋作「特異な彫刻文のある石製腕飾」『古代探叢』Ⅱ 早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集 1985
- 24) 和田晴吾「古墳時代前期の政治と宗教」『日本考古学協会1992年度大会研究発表要旨』1992など。
- 25) たとえば、都出比呂志「古墳が作られた時代」『古代史復元』6 古墳時代の王と民衆 講談社 1989の雛壇式階層図がある。都出比呂志「墳丘の型式」『古墳の時代』7 古墳Ⅰ墳丘と内部構造 雄山閣出版 1992では、前・中・後期に分けて3種類の図が提示されたが、同じ雛壇の中での変化であることに変わりはない。
- 26) たとえば、比田井克仁「西相模における五世紀の社会構成 — その基礎的な把握 —」『西相模考古』2 1993など。